

令和7年度

しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業

～大学連携による地域課題への取り組み～

研究成果報告書

令和8(2026)年4月

しずおか中部連携中枢都市圏

令和7年度 しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業 成果報告書

1 若者に対する新しい静岡市型の採用システム構築の検討について	・・・ 1
(静岡大学サステナビリティセンター 特任准教授 天野 浩史)(静岡市 商業労政課)	
2 登呂博物館の可能性と拡張性を引き出すコンテンツの開発	・・・ 5
(静岡大学教育学部 教授 田宮 縁)(静岡市 歴史文化課(登呂博物館))	
3 大谷・小鹿地区のまちづくりにおけるソフト事業の継続と定着	・・・ 10
(静岡大学グローバル共創科学部 教授 杉山 康司)(静岡市 大谷・小鹿まちづくり推進課)	
4 人生100年時代、シニアの皆さんの地域活動・社会参加を促進したい!	・・・ 15
(静岡大学教育学部 講師 甲斐 温子)(静岡市 高齢者福祉課)	
5 駅前活性化に向けた魅力ある空間づくり	・・・ 19
(静岡大学人文社会科学部 講師 山田 健)(島田市 戦略推進課)	
6 静岡県立川根高等学校の魅力化向上	・・・ 23
(静岡大学情報学部 教授 永吉 実武)(川根本町 教育総務課)	
7 外国人住民の住みやすさ向上	・・・ 27
(静岡大学人文社会科学部 教授 張 盛開)(川根本町 まちづくり推進室)	
8 静岡県立川根高等学校の魅力化向上	・・・ 34
(静岡県立大学薬学部 准教授 刀坂 泰史)(川根本町 教育総務課)	
9 地元企業に目を向けてもらえるための効果的な情報発信	・・・ 38
(静岡県立大学経営情報学部 准教授 上原 克仁)(牧之原市 商工企業課)	
10 「しずまえ鮮魚」を用いた新たな加工食品の商品化	・・・ 43
(東海大学海洋学部 教授 清水宗茂)(静岡市 水産振興課)	
11 しずまえプロモーションの提案・実践	・・・ 47
(東海大学海洋学部 准教授 李 銀姫)(静岡市 水産振興課)	
12 若者に対する新しい静岡市型の採用システム構築の検討について	・・・ 51
(常葉大学経営学部 講師 三浦 卓己)(静岡市 商業労政課)	

13 駿府城エリア（駿府城公園及びその周辺）の歴史観光の活性化 （常葉大学法学部 特任教授 丸岡 浩三）（静岡市 歴史文化課）	・ ・ ・ 54
14 地域資源を活かした地域活性化に関する施策等の検討 （常葉大学経営学部 教授 小豆川 裕子）（静岡市 企画課・産業振興課）	・ ・ ・ 58
15 市が実施する介護予防事業の広報戦略 （常葉大学造形学部 教授 安武 伸朗）（静岡市 地域包括ケア推進課）	・ ・ ・ 62
16 「町民一人スポーツの実現」に向けた事業運営戦略 （常葉大学健康プロデュース学部 講師 神力 亮太）（吉田町 生涯学習課）	・ ・ ・ 66
17 公共施設使用料や教室受講料の見直しについて （常葉大学健康プロデュース学部 准教授 村本 名史）（吉田町 生涯学習課）	・ ・ ・ 70
18 イベント「夜の動物園」等のブラッシュアップ！ （静岡英和学院大学短期大学部 教授 重森 雅嘉）（静岡市 日本平動物園）	・ ・ ・ 74
19 「和菓子バル」を通じた、大井川川越遺跡 PR 手法の提案 （静岡英和学院大学人間社会学部 教授 畑 恵里子）（島田市 博物館課）	・ ・ ・ 79
20 駅前活性化に向けた魅力ある空間づくり （静岡産業大学経営学部 教授 岩本 武範）（島田市 戦略推進課）	・ ・ ・ 82
21 健康づくりに関する情報の戦略的広報 （静岡産業大学経営学部 准教授 万浪 靖司）（藤枝市 健康企画課）	・ ・ ・ 86
22 「和菓子バル」を通じた、大井川川越遺跡 PR 手法の提案 （静岡産業大学経営学部 特任教授 中山 勝）（島田市 博物館課）	・ ・ ・ 90
23 幼児向け環境学習プログラムの開発と実践 （静岡福祉大学子ども学部 教授 坂田 尚子）（静岡市 環境共生課）	・ ・ ・ 95
24 人生 100 年時代、シニアの皆さんの地域活動・社会参加を促進したい！ （静岡福祉大学社会福祉学部 教授 檜木 博之）（静岡市 高齢者福祉課）	・ ・ ・ 100
25 人生 100 年時代、シニアの皆さんの地域活動・社会参加を促進したい！ （静岡福祉大学社会福祉学部 教授 榑木 てる子）（静岡市 高齢者福祉課）	・ ・ ・ 106

26 移住・定住の増加に向けたプロモーション強化 . . . 111

(関東学院大学法学部 教授 牧瀬 稔)(焼津市 誘致戦略課)

27 空き家の解消に関する対策の検討 . . . 115

(関東学院大学地域創生実践研究所 教授 籠谷 和弘)(焼津市 建築住宅課)

地方都市における新しい就活・採用システムのプロトタイプ開発に関する研究
(課題：若者に対する新しい静岡市型の採用システム構築の検討について)

静岡大学サステナビリティセンター天野研究室

教 員：特任准教授 天野浩史

参加学生：柳岡俐日人、小森史靖

1. 要約

静岡市において深刻化する人材採用難を起点に、既存の就活システムとは異なる、新しい就活システムの構想をステークホルダーとの対話・学習・共創を通じて提示することを目的とする研究を実施した。設置した「新しい就活のしくみのデザイン研究会」での全6回の議論や資料調査、インタビュー調査を踏まえ、今後も企業で強化される「就職活動の拡張」ではなく、「学生生活の拡充」への企業の関わりを増やすこと、学生と社会人で線引きされない対等な協働機会をつくること等を通じた「このまちで、あの人たちと生きていたい、働きたい」と思える社会関係をデザインするという新たなプロトタイプを提案した。

2. 研究の目的

静岡市をはじめとした地方都市においては、若年層の地域外流出や企業の人材採用難が続いている。企業各社において創意工夫が進められているが、求人メディアの掲載や選考型インターンシップ、メディアによって形成された就活スケジュール等の既存の就活システムの枠組みの中においては、根本的な問題解決には結び付かず、静岡という地域特性を踏まえれば、首都圏や名古屋圏の企業との初任給や福利厚生といった条件間競争に飲み込まれてしまうことが予想される。

また、既存の就活システムは、企業・学生双方が「選ばれること」を目的として構築した企業像・自己像を提示し合いながらコミュニケーションを進めている。いわば、「仮面舞踏会」のように就活システムを舞台に踊り合うような関係から選考プロセスを進めていくが、不本意なミスマッチが生じている。加えて、「就活のためのガクチカづくり」を意識した学生生活を送る学生も少なくはなく、授業よりもインターンシップを優先せざるを得ない現象も発生している。

以上の状況を踏まえ、本研究ではステークホルダーとの共創を通じて既存の就活システムとは異なる、静岡市型の新しい就活システムの構想を提示することを目的とする。

3. 研究の内容

静岡市内企業の雇用促進を担当する部局からの人材採用難という問題を取り扱うため、その解決策として母集団形成や企業認知向上施策が選ばれやすい。しかし、この一連のフレームは企業サイドでの考え方であるがゆえに、施策の対象となる学生サイドの考え方が抜け落ちやすいし、行政施策上、企業サイドの考え方を優先せざるを得ない構造を持つ。従来の問題解決や認識のフレームから離れ、本来取り扱うべき問題は何かを探索的に向き合う必要がある。

そこで、本研究ではサービスデザイン・アプローチを中心とした参加型デザインのプロセスを採用し、就活・採用の当事者である大学生、企業経営者、人事担当者、自治体職員等と共に、従来と異なる新しい就活システムの構想とプロトタイプ（試作案）開発に取り組む。直線的に進めるのではなく、探索的に議論を行き来しながら本質的な問題とその解決策を検討するため、「新しい就活のしくみのデザイン

研究会」を立ち上げ、ステークホルダーとの対話・学習・共創を通じて問題解決に取り組む。研究会では、静岡市型の新しい就活システムのプロトタイプを生み出すことを目標とし、全6回の定例会議をハイブリッド開催し、オンラインワークスペースのMiroを活用しながら意見やアイデアを可視化する。また、状況に応じて追加調査や議題を変更する。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

全6回の研究会、内2回はゲストスピーカーを招いた事例研究会を実施すること、研究会での議論を通じて新しい就活システムのプロトタイプを生み出すことを計画した。

(2) 実際の内容

研究会は、静岡市と協議の上打診した静岡市内に本社を置く3社の企業が参画した。また、筆者が関わる学生にも打診し、研究会の内容に応じて常時2名～3名が参画した。研究会の実施内容は表1のとおりである。概ね計画通り実施した。

表1 新しい就活のしくみのデザイン研究会 全6回概要

	日程	会場	内容
第1回	2025年10月15日 13:30-15:30	静岡大学	研究会参加者から就活や採用における現状の問題意識の共有し、現状の問題点や構造を議論。
第2回	2025年11月12日 13:30-15:30	静岡大学/ オンライン	長野県・塩尻市で地域の人事部を展開するNPO法人MEGURU代表理事横山氏からの話題提供をもとに、静岡市での地域ぐるみで就活・採用・人材育成について議論。
第3回	2025年12月1日 13:30-15:30	静岡大学/ オンライン	第2回での議論を踏まえ、静岡市内における就活・採用・人材育成のステークホルダー分析、大学生へのインタビューの実施、プロトタイプの方向性について議論。
第4回	2026年1月21日 13:30-15:30	オンライン	プロトタイプの方向性について議論。
第5回	2026年2月10日 15:00-17:00	静岡大学/ オンライン	静岡市・草薙を中心に企業と大学生との協働をマネジメントする一般社団法人草薙カルテッド小林氏からの話題提供をもとに、静岡市での大学生と企業の関係性について議論。
第6回	2026年2月26日 10:00-12:00	静岡大学/ オンライン	大学生の学生生活が豊かになるためにどのような機会をつくるか?を議論し、プロトタイプ案を構築。

なお、ゲストスピーカーについては、当初、IT企業によるテクノロジーを活用した就活の枠組みの話題提供を予定していたが、企業と大学生との協働マネジメントに関する話題提供者に変更した。これは、議論を進める中で就職活動という枠組みを超えた学生生活支援の観点からの検討が必要となったためである。また、当初は研究補助者による二次資料調査を進めていたが、大学生へのインタビュー調査を追加で実施した。これは、議論を進める中で大学生の間で「ガクチカをつくるために学生生活を活用する」という現象が発生していること、大学生の学生生活から就職活動への変遷を詳細に捉える必要が生じたためである。



図1 第1回研究会



図2 第5回研究会

(3) 実績・成果と課題

研究会での対話・学習・共創を通じた成果は、次の2点である。

①「ガクチカ」が学生生活に与える影響性の明示

ガクチカとは、採用面接で質問される「学生時代に最も力を入れたこと」の略語であるが、大学生の間では「ガクチカをつくるために学生生活をどのように過ごすか」という逆転的な理解がされており、「ガクチカをつくるためにサークルを辞めた先輩がいる」といった事例も報告された。また、追加で行ったインタビュー調査では、「高校生のときにはガクチカを知っていた」「大学入学時のガイダンスで重要だと教えられた」「いろいろな活動を始める際、ガクチカを意識して、どう転んでも大丈夫のようにしておこうと思っている」という語りがあり、ガクチカというワードが高校生にも広がり、大学入学時や新たな活動を始める際、意思決定の要因となっている可能性が示された。

②「就職活動・イベントの拡張」に対する「学生生活の拡充」の提案

静岡市では就活カフェという形式で企業担当者と出会える場があったり、学生インターンがつくる就活イベントがあったりと、企業や自治体によって多様な取り組みが生まれている。このような就職活動・イベントの拡張化は人手不足社会の静岡において益々広がりを見せていくと推測される。本研究会では、こういった流れは認める一方で、拡張化以外の選択肢が必要なのではないかという議論、そして就職という点ではなく、一人ひとりの学生のこれまでとこれからを地域ぐるみで支えるような取り組みが必要なのではないかという議論に焦点が当てられた。

筆者はこれらの議論を就職活動・イベントの拡張に対して「学生生活の拡充」として提案をしたい。言い換えれば、「静岡市で学生生活を過ごせたから、この人たちと一緒にこのまちで生きたい、働きたい」と思えるような社会関係を紡ぎ、学生生活を豊かにできる環境を整備することである。すでに存在する静岡市内の取り組みである大道芸ワールドカップやシズオカカンヌウィーク等、大学生と社会人が線引きされず、対等に協働する場への参加機会を広げること、GIVING CAMPAIGNやしぞーかわかものアクションアワード等、サークルや学生団体の活動を応援・支援する枠組みに参画するといった、企業と学生生活が接続できる機会への参加を促しながら、大学生と人事・経営者という関係性ではなく、個と個の関係性の創出を進めていけるとよい。

こういった提案に対して、具体的にどこまで企業が参画できるかについての詳細な検討・評価までは本研究会では議論しきれなかった。次年度以降、有志の研究会として継続し、実験的な取り組みを続けながら実装の方法や枠組みを構築していきたい。

(4) 今後の改善点や対策

コア・コンセプトのプロトタイプを整理できたため、今後は対話・学習・共創のステークホルダーを広げていながら、具体的な仕組み化についての検討と試行を進めていきたい。日程の関係上、参画を依頼できなかったステークホルダーも多いため、次年度以降、研究会の構成員を拡大、公開型の研究会を実施していく予定である。同時に、本研究は望む社会を具体化するための当事者との共同研究、すなわちアクションリサーチという側面を持つ。様々なステークホルダーとのネットワーキングとオーガナイジングの場として研究会を位置付け、望む社会の具体化を進めていきたい。

5. 地域への提言

今回の課題は雇用の問題を扱う商業労政課からの提案であったが、大学生という視点から考えると、移住定住施策、雇用施策、生涯学習施策の横断的な検討が必要になる。すなわち、静岡市に定住したいと思える環境づくり、地域活動も含めた社会的な学びを続ける環境づくりと併せて、働く環境づくりについて検討できると良い。情報共有だけではなく、連動した施策づくりの検討と実践を提言したい。

6. 地域からの評価

参画した企業からは、「日頃とは異なる視点から採用活動を考えることになり新鮮で学びが多かった」「こういった検討機会があれば今後も参加したい」という声をいただいた。また、大学生からも「自分の就職活動前に、企業の方々とお話できてよかった」等の声をいただいていた。

登呂博物館の可能性と拡張性を引き出すコンテンツの開発

静岡大学 教育学部 教授 田宮 縁

代表学生 教育学部 1年 村松奏汰

1. 要約

本研究は、登呂遺跡に関するアンラーニングをもたらし、シビックプライドの醸成につながるおとな（教育関係者・市民）を対象としたコンテンツを作成することを目的としている。

具体的には、社会教育主事資格取得に関する科目「生涯学習演習」受講者とともに、登呂博物館・登呂遺跡の可能性と拡張性を引き出すコンテンツの作成という課題に向けてのPBL(Project Based Learning)を実施した。授業の成果をESDフォーラムにて報告し、有識者からの評価をもとにコンテンツ試案を作成、実装可能性や効果の検証を行った上で、成果物を作成した。

作成したコンテンツに関しては、教育関係者・市民への広報のほか、次年度以降の大学の授業で活用するなど教員をめざす学生の意識の変容を促す仕組みを検討した。

2. 「生涯学習演習」について

(1) 授業の概要

【授業の目標】実践を通して、持続可能な社会の構築をめざしたコミュニティ形成の一助となる社会教育における講座の企画・運営の手法を身につける。

【学習内容】「社会教育・学校教育融合型のESDを主眼としたカリキュラムパッケージの開発」を軸に、ESDやESDフォーラムミュージアムジャック2024を学んだ上で、静岡市立登呂博物館を対象に「(仮) 静大生による誌上ミュージアムジャック」を行う。

【手法】PBL(Project Based Learning)問題解決型学習

(2) カリキュラムパッケージミュージアムジャックの活用

ミュージアムジャックとは、以下の3点を特徴としている。

①社会教育と学校教育が連携し、おとなも子どもも持続可能な社会の構築をめざし行う教育活動、②子どもの遊び心をくすぐり探究活動に巻き込んでいく「リアルごっこ遊び」がその特徴、③本物のミュージアムでガイドやスタッフの仕事を行う職場体験プログラム

文部科学省ユネスコ活動費補助金（2023年度、2024年度）を活用し、カリキュラムパッケージとして全国に発信している。

モジュール	テーマ	予定日	予定時間
モジュール0	ガイダンス	4/17	13:00~16:00
モジュール1	登呂博物館フィールドワーク	5/8	13:00~16:00
モジュール2	「?」「!」の洗い出し	5/15	13:00~16:00
モジュール3	ESDフォーラム	7/12	13:00~16:00
モジュール4	静大生による誌上ミュージアムジャック	7/17	13:00~16:00

詳細は、ネットワークラボ公開資料より閲覧が可能

<https://knotworklab.com/data/2439/>
<https://knotworklab.com/data/2041/>

(3) 授業の展開

	ストーリー (授業展開 木曜日1・2時限)
モジュール0	4/17 ガイダンス ESD と SDGs4/24/・5/IESD フォーラムミュージアムジャック 2024
モジュール1	5/8 登呂博物館フィールドワークガイダンス 5/813:00~16:00 ガイドツアー
モジュール2	5/15「?」「!」の洗い出し 6/5・19・26 進捗状況報告 7/3・10 プレゼン準備
モジュール3	7/12ESD フォーラム 7/17 振り返りと今後の進め方
モジュール4	静大生による誌上ミュージアムジャック



授業は、モジュール0～3の日程で行った。モジュールとは、カリキュラムパッケージのモジュールシートを活用した。モジュール3のESDフォーラムでの学生の報告をもとに筆者らがモジュール4「静大生による誌上ミュージアムジャック」を作成した。

(4) ESD フォーラムについて

下記の日程で、クローズドで行われた。学生の発表時間は3分、他分野の専門家であるESDコーディネーターが発表に対して質問を投げかけ、登呂博物館館長、学芸員も交えて対話を重ねた。

日時 2025年7月12日(土) 13:30~16:00 場所：静岡市立登呂博物館

プログラム

- 13:30 概要説明
- 13:35 プレゼンテーション 第1部 (持ち時間：3分)
 - 01現代の家の間取りは四角が基本、縄文弥生は円形が基本、？
 - 02高床式倉庫は地域と気候によって変わる!?
 - 03登呂遺跡はスギが多すぎる？！
 - 04歩いてみないとわからない!? 登呂のヒミツ
 - 05登呂と洪水の付き合い方。
 - 06登呂遺跡ってどんなところ???
 - 07登呂遺跡の人々は本当に「平和」に暮らしていたのだろうか。
- 14:00 ダイアログ ESDコーディネーターからの質問・コメント等
- 14:30 休憩
- 14:40 プレゼンテーション 第2部 (持ち時間：3分)
 - 08残された資料から戦時中の登呂の人々の想いについて考察する
 - 09繁がり、ともに歩む「登呂遺跡」と「子どもたち」
 - 10日本の遺跡名にアルファベットが!?! 違和感の謎に迫るー
 - 11稲作とともに変化する土器

- 12貝塚ないんかい?!
 - 13登呂遺跡は“お米をつくった場所”だけじゃない。“音をつくり、文化をつないだ場所”だった
 - 15:00 ダイアログ ESDコーディネーターからの質問・コメント等
 - 15:30 講評
 - 15:50 終了予定
- 【講評】登呂博物館 岡村渉様、松原草太様
 【ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムESDコーディネーター】
 柿島安博様 (中央動物総合専門学校顧問、日本平動物園園長)
 和田精吾様 (富士市教育研修センター指導主事 元富士第一小学校校長)
 山田浩昭様 (浜松学院大学教授 元静岡県立浜松特別支援学校校長)

付記

- 令和7年度しずおか中部連携中核都市圏地域課題解決事業
- 静岡大学学長戦略運営経費「社会教育・学校教育融合型のESDを主眼としたカリキュラムパッケージの開発」

学生のスライド資料

静岡大学教育学部社会教育主事資格取得に関する科目「生涯学習演習」

ESDフォーラム「(仮) 静大生による誌上ミュージアムジャック」 プレゼンテーション

現代の家の間取りは四角が基本、縄文弥生は円形が基本、？

概要

全国的に見て、縄文時代から弥生時代前半までは方形の間取りをした住居も存在しましたが、半数以上は円形住居だったそうです。しかしその理由について確定的なことはまだ分かっていないことが調べていく中でわかりました。ですが、考察については多くなされたため、自分の考察も交える形になりますが、いくつか紹介したいと思います。

主には、「建築の容易さ」、「断熱性」、「空間の有効活用」、「宗教的・文化的要素」の5つだそうです。

円形の方が建築しやすいという利点がありますが、直接的な要因ではなさそうです。この中では「断熱性」「宗教的・文化的要素」の2つに着目して説明していきたいと思います。まずは断熱性について、円形は暖炉や囲炉裏から出る熱を循環させやすいという利点があります。また、茅葺き屋根は、厚みがあり、空気を多く含むため、非常に高い断熱性を持っています。夏の暑い日差しを遮り、冬の冷気を防ぐ効果がありました。最後に宗教的・文化的要素について、昔の人は「円」をとても意識していました。詳しいことはわかっていますが、住居の間取りだけでなく、貝塚や墓、縄文時代から使われていたストーンサークルなどが挙げられます。円は集団としての断絶を高めるものとして重要視されていたようです。

資料1

弥生時代の遺跡



円形

現代の家の間取り



四角

資料2

弥生時代前期



円形だと側面全体を茅葺きで覆いやすい

弥生時代後期



文献・資料

- ・復元的視点による竪穴住居跡の発掘調査 (2004) 福島雅博
- ・Q & Aで読む弥生時代入門 (2024) 吉川道郎
- ・知られざる弥生ライフ (2019) 藤田亜紀子
- ・ストーンサークルは、なぜ円い? (2015) 小林達雄
- ・環状列石とは何か? (2021) 瀬田宏
- ・市原市教育委員会 (2022)『市原市・中台遺跡』：後期～古墳期への平面変化の詳細分析
- ・佐賀県考古資料 (2019)『竪穴建物の平面形』：円→横円→方形への変遷パターンと時期
- ・季刊考古学 44号「住居論 竪穴住居の間取り」(1993) 金井安子
- ・ジャパンナレッジ 改訂新版 世界百科事典 <http://chakpt.com>

発表者

教育学部美術教育専修 1年
325A4512 村松奏汰

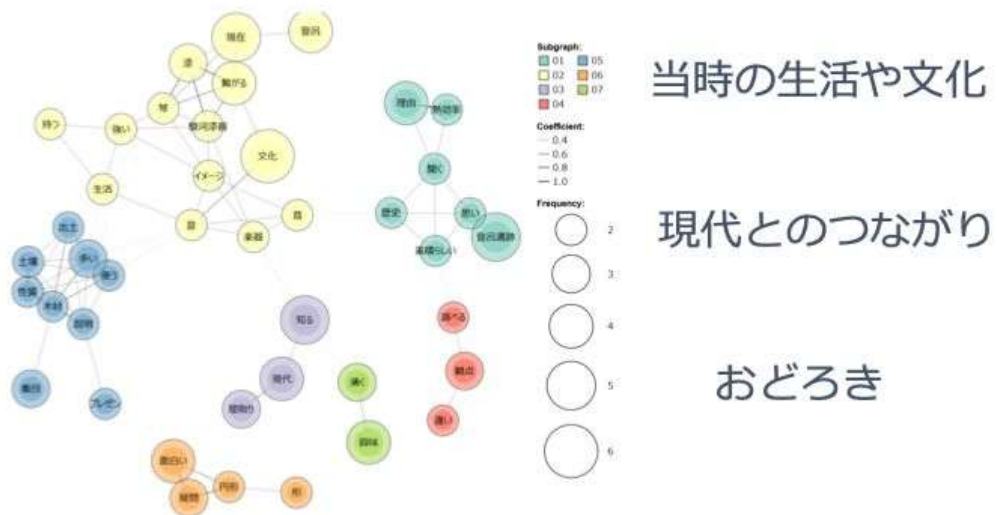
ESD フォーラムの様子や学生の資料はネットワークラボ活動報告 612 から閲覧可能
<https://knotworklab.com/activity/2025/2519/>

(5) 授業終了時の振り返り

【アンケートの内容】①ESD フォーラムの感想（100文字程度で簡潔に） ②-A 授業を受ける前後で、登呂遺跡・登呂博物館への思いの変化はありましたか。 ②-B なぜ、変化があった（あるいは、なかった）と思いますか。 ③あなた自身のプレゼンテーションへの自己評価（100文字程度） ④-A ダイアログ等を通して他のプレゼンテーションで登呂遺跡・登呂博物館について興味を喚起したもの ④-B 興味を喚起した理由（100文字程度） ⑤その他（授業全体の感想等があれば100文字程度）

【分析】KH コーダを活用し、テキストマイニングを行った。今回は、本コンテンツの開発に関係する部分のみ掲載する。

④ 興味を喚起したプレゼンとその理由



琴という一つの出土品から漆について触れて静岡の工芸品に繋がることで、大昔の文化と現在の私の文化との結びつきが感じられたことに心がくすぐられた。～****4109

縄文時代や弥生時代の住居は円形であることに今まで全く疑問を感じてこなかったため、そこに着目したうえできちんと根拠があり意味ある形だったと知れたことがとても面白かったため。****0007

3. 成果物

(1) コンテンツ完成に至るプロセス

学生の探究、ESD フォーラムでの対話、アンケートの結果をもとに、登呂博物館監修のもと、柿島安博氏（EESD コーディネーター、中央動物総合専門学校顧問）とともにコンテンツパイロットバージョンを作成し、2025年12月にアンケート（50名程

度に配布)を実施した。その結果、ターゲット読者がおとなであることを明記するなどの微調整を行い、2月に「静大生による誌上ミュージアムジャック(自分でつくるミニ絵本)」の完成に至っている。

(2) コンテンツの特徴



限られた予算の中で多くの方にお手に取っていただける形を模索し、ハサミを入れてミニ絵本をつくるスタイルを選択した。こちらについては、パイロットバージョンのアンケートで、「遊び心があって良い」という複数の評価をいただいている。

内容については、学生同士のプレゼンに対する他者評価では、「当時の生活や文化」、「現代とのつながり」、「おどろき」に関する記述が多かったため、その点を取り入れながら、構成を考え、追加調査を加えた。

例えば、地場産業である駿河漆器につながる可能性から「静岡のものづくりは登呂遺跡にあった」を前面に出した。また、ESDフォーラムでの学生のプレゼンからESDコーディネーターも交えた対話の中で、岡村館長から「登呂のムラは、2700年前ラグーンだった」という発言を反映した。



(3) コンテンツの広報

ネットワークラボからの広報のほか、2026年3月7日のESDフォーラムミュージアムジャックで研究報告(タカミヤ環境ミュージアム:北九州市)を行い、配布を開始する。来年度以降は、

登呂博物館、静岡大学から成果物を発信する予定である。

成果物は下記よりダウンロードできる。

<https://knotworklab.com/data/2651/>

大谷・小鹿地区のまちづくりにおけるソフト事業の継続と定着

地域創造学環スポーツプロモーションコース

グローバル共創科学部 杉山康司研究室

教 員：教授 杉山 康司

参加学生：森千紘、芹澤小夏、他

1. 要約

事業計画

本事業は静岡大学の学生と大学周辺地域の住民との交流機会を創出するとともに、地域住民の持続的な健康づくりを提供することを目的としてウォーキング・スポーツステーション (WSS) を実施し、その効果について検討した。ウォーキングをはじめとする様々なスポーツ活動の拠点をイメージしたネーミングで、WSSのサテライトを大学周辺地域に出向き、地域住民の方々が主体的に健康づくりを行えるきっかけとなることを目指した。地域の公民館や公園といった、地域住民の憩いの場をスポーツや運動の拠点としながら、大学の知をステークホルダーに提供し、コミュニティ・ウェルネス形成に向けた試験的事業とした。また、本活動では、「WSSフィットネス手帳」を作成し、参加者が主体的・能動的に取り組む仕掛けづくりを行った。協力を得ることができた自治会は小鹿、片山、曲金、池田の4地区であり、どの自治会においても2回ずつ実施した。第1回目のフィットネステストから2か月の期間を設け、その期間に各自が手帳を活用しながら自主的に運動に取り組むことをねらいとした仕掛けづくりを行い、2か月後に第2回目の測定およびアンケート調査を実施した。結果、池田地区を除くイベント1回目および2回目の両方に参加した18人の内、アンケートに回答した10名（男性3名、女性7名）を分析対象としてみると、バランステストとして採用したスラックレールのテストを除いて改善する傾向がみられた。また、アンケートの日常生活における「運動時間」は、1回目で 3.7 ± 1.1 点であったが、2回目は 4.2 ± 1.1 点に増加した。さらに、イベントを通してノルディックポールの使用方法を習得したことや、参加者同士の交流を広げ、楽しみながら参加している様子が観察され、「楽しかった」と捉える意見や、自身の身体を見直すきっかけになったとする回答が多くみられた。さらに、自治会主催のイベントであったことから多くの男性参加者を募ることができた点も特徴として挙げられる。自治会を介してWSSのような健康と運動を学ぶ機会は新たなコミュニティを創出し、地域全体に健康意識とQOL向上に寄与することが示された。

2. 研究の目的

本研究はWSSの第1回目の測定から2か月の期間を設け、その期間内に各自が手帳を活用しながら自主的に運動へ取り組むことをねらいとした仕掛けづくりを行い、2ヶ月後に実施した第2回フィッ

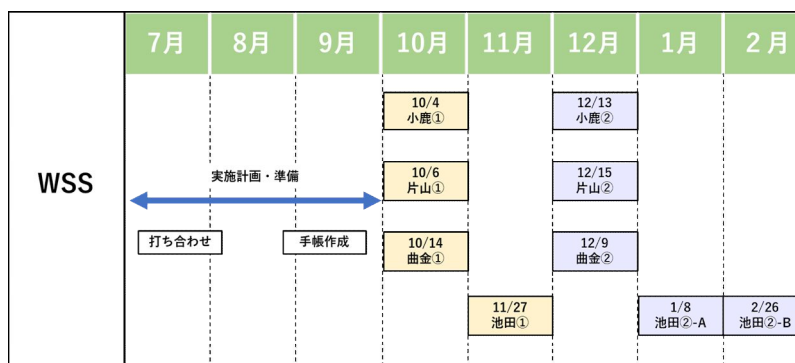


図1. WSSスケジュール.

トネステストやアンケート結果および参加者の声などから、WSSの価値を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の内容

図1にスケジュールを記載する。7月から9月までに実施計画と各自治会に対する協力依頼を行い、協力が得られた自治会（小鹿、片山、曲金、池田）と日程調整を行った。10月に小鹿、片山および曲金の3地区でそれぞれ第1回のWSSを開催し、2か月後に第2回のWSSを実施した。また、池田はさわやかサロン（後期高齢者の集い）に開催の機会を得ることができ、対象者がより高齢となることから分析対象とはせず、今後の取り組み課題を得るためのパイロット的開催とした。

1) WSSフィットネス手帳作成

WSSで用いた手帳は、本活動における参加者の主体的なフィットネスづくりを促進させ、心身のウェルビーイングの実現を目的として作成した。手帳は全4章で構成され、居住周辺地域や家庭でも継続してフィットネスづくりを行えるような内容とした。

1章 ノルディックウォーキング

第1章においては、歩行術としてのノルディックウォーキングについて紹介し、ノルディックウォーキングの健康効果やポールの活用方法が記載されている。また、日々の生活にも有用なポールを用いたストレッチおよびエクササイズについても紹介した。

2章 ウォーキングコース紹介

前年度までに作成した「大谷・小鹿ウェルネスエリアMAP」を紹介している。5つの町内を巡るウォーキングコース、恩田原スポーツ広場を起点とした2つの周回コース、静岡大学構内を歩くための静大ウォーキングマップ（ファルトレクコースとして表記）の計8コースを記載し、普段のウォーキングへの活用や、これからウォーキングを始めるきっかけとなる情報も提供した。

3章 フィットネステスト

イベント内で実施した5つのフィットネステストについて記載し、自らの結果をグラフで比較できるようにした。主な体力項目は①脚筋力、②股関節柔軟&全身バランス、③柔軟性、④動的バランスおよび⑤身のこなし力である。日常生活に結びつく体力要素を取り入れたテストであることから、家庭で測定する方法や、各種目を鍛えることによる効果も記載した。

4章 日々のエクササイズ

参加者が家庭で取り組むことができるエクササイズを7種目紹介している。また、7つのエクササイズを実施した日にちをチェックできるようにチェック表を作成し、継続的な実施を促すページを設けた。

2) 体力テストとアンケート調査

WSS参加者には1回目と2回目において身長、体重、身体組成、血圧およびフィットネステスト5項目（立ち上がりテスト、ステップテスト、座位リーチテスト、バックスクラッチ、ファンクショナルリーチテスト）を実施した。また、各地区1回目と2回目のWSS実施後にアンケート調査を行った。本アンケートは参加者の心身の健康状態を把握し、WSSを通じた健康とウェルビーイングの変化について検討するデータとした。実施期間は令和7年10月4日～令和8年12月15日とし、WSS実施後に参加者に対してアンケートの配布、回収を行った。なお、アンケートの回答方法はWeb媒体（Google Form）と紙媒体で用意し、参加者が選択できるようにした。本アンケートは「個人の属性について」「運動習慣について」「身体的な困難について」「お住まいの地域について」の4項目とQOLに関する質問の計28の問いから作成した。

4. 研究の成果

1) 当初の計画

当初は地域ごとに生涯学習等のために町内の方々が集う集会場（5会場）を利用し、各1回の静大WSS教室を開催し、WSSの実施後、1～2か月間の個人活動期間を設け、個人による主体的な健康づくり活動を行った後にウォーキングコースの活用または親子のスポーツ・運動習慣の定着に向けた取り組みについて調査する予定であった。しかし、自治会に依頼をする段階で、親子でのニュースポーツ体験よりも中高齢者向けのWSSに興味関心を寄せる傾向や参加者のニーズがあったため、本事業では親子のコンセプトは取り止め、中高齢者向けのWSS開催を主たる取り組みとした。また、大谷・小鹿周辺地域での開催を主にもくろんだが、自治会の協力を得るには一研究室の働きかけでは困難な面が多く、隣接する別の自治会（曲金、宮竹）にも協力依頼を行った。その結果、曲金から協力の返事を得ることができ、対象とした自治会は当初計画した地域とは異なった。

2) 実際の内容

小鹿地区は、参加者がノルディックウォーキングの基本および楽しさを理解することを目的とした。1回目は特別講師としてノルディックウォーキングクラブ「爽」の代表である前澤氏を招き、ノルディックウォーキングの正しい歩行方法や、実際にポールを使用したエクササイズについて講義を行った。2回目は、近隣の公園でノルディックウォーキングとモルックを実施し、学生と参加者との交流を図った。片山地区は、手軽に楽しく運動を行うことをイベントの目的とした。夜間の開催であったため、安全面に配慮し、屋内で脳トレバーチャルチューブウォーキング（昨年度までに作成したウォーキングコースの案内動画を見ながらその場歩きをする）を実施した。歩行速度や腕振りを補強するチューブの有無は、参加者自身が選択できるようにすることで、個々の体力レベルに合わせた運動強度で活動することが可能になった。また、曲金地区においてはふれあい公園や舗装された広い道に囲まれた開放的で安全な地域であり、地域住民が主体的に集い、継続的に運動を実践できる拠点となると考えた。そこで、手帳に掲載されているウォーキングコースに位置していない地域であったため、新たに公園を中心とした周回コースを紹介し、日頃から運動に親しめるように試みた。なお、池田地区は池田公民館で高齢者の地域交流を目的として月2回行われている「さわやかサロン」内で実施した。本イベントは参加者の平均年齢が80歳以上であることを踏まえ、比較的年齢層の高い集団の方々と取り組めるイベント内容としながら、フィットネスづくりに繋げていくことを目指した。

3) 実績・成果と課題

イベント1回目および2回目の両方に参加した18人の内、アンケートに回答した10名（男性3名、女性7名）を分析対象とした。アンケート項目のうち「日常の困難さ」については、1人を除いて「困難ではない」と回答したことから、今回の参加者は体力および身体機能が一定水準以上に保たれている集団であったと考えられる。

スラックレールは、評価基準が確立されておらず、測定の判断が難しい面もあり、9名が得点の減少を示した。高齢者にとって、動的バランス維持は困難であり、当初から短期間での向上は望めない体力要素であると予想されたが、楽しく取り組める体力テストであり、試みるのが重要な項目と捉えている。そのため、本研究ではスラックレールを除く4種目の合計得点を算出し平均値を比較した。その結果、1回目は14.7±2.9点、2回目は15.5±2.1点であり、全体として増加傾向が認められた（図2）。

アンケートにおける「運動時間」は、1回目が3.7±1.1点、2回目が4.2±1.1点であり、0.5点増加した。一方、「運動頻度」は1回目、2回目ともに4.5±0.5点であり、変化はみられなかった。手帳に記入された取り組みの実態から普段行っていた運動に加えて、WSS手帳に掲載された「日々のエクササイズ」を実施したり、参考にしたりすることで普段の取り組みにマッチできた参加者は目的をもって運動に取り組めるようになったことが考えられる。

一方、前後の体力合計得点における増減に基づき、参加者を増加群、維持群、減少群の3群に分類したところ、増加群では、いずれかの種目で3点以下の評価がみられ、得点を向上させやすい状況にあったと考えられる。維持群では、両日ともに満点を示した項目が存在し、運動能力が比較的高い集団であることが示された。また、チェック表の利用回数が多く、7項目を偏りなく実施した者と、自身の弱点に応じて特定の項目を重点的に実施した者に分かれた。日々の体力チェックの実施状況に着目すると、「片脚バランス」および「ウォーキング」は実施頻度が高く、「タオル肩回し」や「タオルストレッチ」などのストレッチ系項目も高い実施率を示した。また、合計得点の増減にかかわらず、多くの参加者が複数のエクササイズに積極的に取り組んでいた。スラックレールにおいて得点が増加した1名は、「片脚バランス」を重点的に実施しており、継続的な実践によって効果が現れる可能性が示唆された。

参加者の感想では、普段とは異なる体験ができたことを「楽しかった」と捉える意見や、自身の身体を見直すきっかけになったとする記述が多くみられた。また、普段あまり使用していない身体部位の存在に気づき、体力の低下や身体的課題を実感したとの意見も挙げられた。さらに、女性参加者を

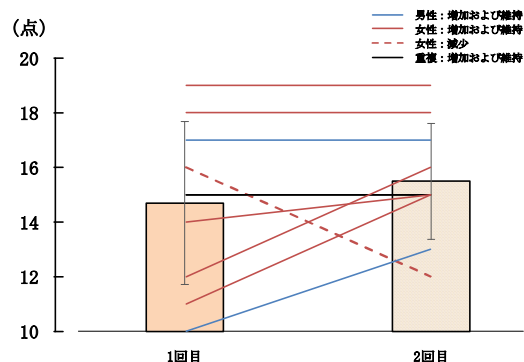


図2. フィットネステストにおける合計得

中心に交流が活発に行われ、WSSを通じて近況報告や日常的な声掛けが行われる関係性が構築されたことから、相互に運動への意識が高まった可能性が示唆された。以上より、WSSは運動の楽しさを提供するとともに、参加者が自身の健康状態や身体機能に気づく機会を創出したと考えられる。

今回は各地区の自治会を拠点としてイベントを実施したことにより、これまで参加が少なかった男性の参加意欲が高まる傾向がみられたことも注目すべき点である。一般的に市民向け健康イベントは女性の参加割合が高い傾向にあるが、自治会は男性が中心となって運営している地区も多く、活動の拠点を地区単位に置くことは、男性のイベント参加促進という観点から有効な方策であると考えられる。今後は、自治会活動と健康づくりを結び付けた取り組みをさらに推進し、性別や年齢を問わず参加しやすい環境づくりを進めることが重要であると考えられる。

4) 今後の改善点や対策

本研究はWSSにおいて2か月間の自主的な運動機会を設けて実施し、その前後における体力の変化およびアンケート結果から効果を検証した。その結果、WSSなどの健康意識の啓発イベントは、もう少し頻繁に介入することが必要であると思われた。また、測定用具や測定方法のパネルを各公民館に設置し、健康手帳を活用して自治会独自のイベントへと発展させたいねらいもあったが、自治会独自の運営を促すには至らなかった。今後は地域のスポーツリーダーを養成するような取り組みや仕掛けづくりが必要であると思われる。

5. 地域への提言

WSS実施により、各地区において健康増進および地域住民同士の交流機会を創出することができた。得られた効果は参加者によって多様であったが、フィットネステストの点数の増加といった直接的な運動効果にとどまらず、地域に対する関心や愛着の向上、さらには地区を超えた住民同士の新たなつながりの形成など、社会的側面においても好影響が認められた点は大きな成果である。

一方、今後の課題として、日常的に運動習慣を有していない層へのアプローチを一層強化していく必要もある。本イベントの参加者は比較的健康意識の高い層に偏る傾向がみられた可能性があり、運動に無関心である層や、運動に対して心理的・身体的ハードルを感じている住民に対する働きかけが不可欠である。そのためには、運動そのものを用いて宣伝するのではなく、「交流」「楽しみ」「地域活動への参加」などの参加動機の多様化を図り、参加への心理的負担を軽減する工夫が求められる。また、本取り組みを一過性のイベントで完結させるのではなく、より多くの地域住民を巻き込んだ継続的な活動へと発展させていく視点が重要である。現状では我々が中心となり、企画・運営を担う形が主であったが、本取り組みを契機として、各地区が主体となり、自主的に運動や交流の機会を創出できる体制の構築を目指すことやWSSの取り組みを理解し、地域で積極的に活動するリーダーの養成に向けた助成を行うことが急務と思われる。

6. 地域からの評価

1) WSS 参加者

- ・大学生の皆さん、地域の友人と一緒に楽しい時間を過ごさせていただきました。大学生の皆さんにぜひ地域の活動（「放課後子ども教室」をやっていますので…）に参加していただきたいと思えます！お願いします。
- ・とても楽しかったです。もう少し暖かいと良かったと思います。
- ・とても楽しかったです。日常生活に運動（体を動かすこと）が加わり、メリハリがついたように思えます。ありがとうございました。
- ・とても楽しかったです！！自分の体とむきあい、確認することができました。学生の皆さんの教え方もとても上手でやさしく、わかりやすくうれしかったです。本当にありがとうございました。
- ・楽しかった。身体のことを考え直す良い機会だった。学生さん達も明るく、参加できたことがうれしく思う。
- ・受講してから、自分が健康に暮らしていくには、日々、ほんの少し努力していくことが大切という思いが腑に落ち、ウォーキングに励むようになりました。お陰さまで、初めて数日経った頃から、膝の痛みがなくなり、姿勢も良くなってきたように感じています。どうもありがとうございます。
- ・参考になりました。今後できるだけトレーニングを続けたいと考えます。
- ・参加者が少ない中、熱心に指導いただきました。ありがとうございます。
- ・15分間まともに歩くのが大変だということがわかりました。
- ・自分の体力が分かった。楽しみながらできたので良かった。

- ・本日は大変楽しくやらせていただきました。ありがとう。
- ・静岡大には大変お世話になりました。今後共よろしくお願い致します。この活動を活かし、ぜひ続けることを期待します。

2) 協力自治会代表者

片山地区 R7年度副会長

講習で最も印象に残ったのは、最後のバーチャルウォーキングでした。腕を振って、足を上げて、15分間「歩く」ことが、今の自分にはいかに大変になっているか、実感しました。普段の生活で決して楽をしているとは思えませんが、15分間歩くことさえできないほど、体を動かしていないということだと思います。今回の講習参加者は高齢者ばかりでしたが、当自治会でも約1/3は高齢者です。でも、高齢者でも「日々のエクササイズ」は実践できます。貴研究室の活動目標は幅広い世代の健康増進にあるように思います。来年度の企画を楽しみにしています。

曲金六丁目 R7年度自治会長

2025年度は、静岡大学杉山研究室の皆様と、ノルディックウォーキングや体力測定など、普段なかなか行うことのない新鮮で健康的な活動を実施しました。曲金六丁目のふれあいクラブ(敬老会)の皆様を中心に参加され、若い大学生と一緒に体を動かすことで自然と会話が生まれ、普段あまり言葉を交わさない方同士でも交流が深まった点が印象的でした。自治会活動が縮小傾向にある中、地域に新しい価値ある機会を提供していただいたことに感謝しています。

池田地区 R7年度自治会長

利用者の方たちは体を動かすことが大好きです。普段体験できないノルディックウォーキングにも積極的に参加していたので私達もいい経験ができました。いつも私が体操を担当しているので少しマンネリ化していたところでした。利用者によって、筋力、柔軟性、体力など様々ですので無理なく自分に合った運動を選べるといいですね。幅広く選択肢の多い指導を期待しております。先日いただいたフィットネス手帳とてもいいですね。家に持ち帰って普段の生活に取り入れてもらえたらと思います。これからも地域の人達の健康寿命を延ばせるよう、ゼミの方の力を貸していただきたいと思っています。

人生 100 年時代、シニアの皆さんの地域活動・社会参加を促進したい
(静岡市高齢者福祉課)

静岡大学 教育学部 甲斐研究室

教 員：甲斐 温子

参加学生：杉本 冬衣、阿部 明柚乃、

内海 理名、築地 春日、宮下 優月季、

山本 亜佑美、東 椋、小川 知優、

池谷 彩莉、岩本 育子、平山 大空翔

1、要旨

本研究では、静岡市高齢者福祉課と連携し、静岡市内の高齢者福祉施設において高齢者と大学生との短歌交流を実施した。市内八か所の高齢者福祉施設において、参加者と日常の様々な経験や感情を短歌にする活動を行い、作品は歌集として纏め、参加者および静岡市内の各施設、大学付属図書館等に寄贈し、広く活動周知を行った。

2、研究の目的

本研究の目的は、高齢者の方々の社会参加・地域活動の一層の充実を図ることである。静岡市の高齢化率は 2040 年に 36.8%となる見込みである。働く高齢者が増加する一方で、地域活動・社会参加への参加率は減少傾向にあることが課題視される。本研究では、和歌文学研究の見地から、高齢者と大学生との短歌制作・歌集編集を通じた対面交流を実施し、高齢者の方々が日々を楽しみ、心身共に健康な生活を送る一助となるよう働きかけるとともに、高齢者施設における異世代交流のモデルの一つを提示するものである。

3、研究の内容

高齢者の方々の多様な地域活動・社会参加を促進するため、静岡大学の学生との短歌交流を実施し、さらに歌集の編集を行う。

当該の短歌交流は、「繋ぐ」とのプロジェクト名で、すでに過去四年間にわたる実施実績がある。一連の交流活動は、杉崎哲子先生（元静岡大学教育学部教授）の企画によるもので、コロナ禍中の令和三年度、「静岡を笑顔に」をテーマに静岡市高齢者福祉課との共同プロジェクトとして始動した。以降、「静岡で心豊かに」（令和四年度）、「静岡を共に創る」（令和五年度）、「繋ぐ・私たちの言葉一語り紡ぎ、共に楽しむ一」（令和六年度）と継続してきた（うち、令和六年は本研究事業の助成対象外）¹。本年度は、その交流活動の最終年度に位置付けられる。

本研究の目的である、高齢者の方々の社会参加・地域活動の充実を達成するため、本年度も引き続き短歌による交流「繋ぐ 一世代と時をこえて一」を計画した。社会参加の基盤となるのは、多様な人々

¹ 過年度の短歌交流の詳細については、杉崎哲子「短歌による交流」（『繋ぐ一世代と時をこえて一』令和八年二月）、および『しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業 成果報告書』（令和三年度～令和五年度版）による。

との「言葉」による交流機会であろう。自らの経験や感情を言語化し、共有する活動の一環として、五七五七七の短い定型詩である短歌（和歌）の作成は意義有る活動と考える。千年を超える歴史をもつ和歌は、その始源より、感情の表出・伝達・共有の手段として機能してきた。複雑な感情も、見知らぬ人々同士も、詩歌の形式であれば、感情を言語化し共有し得る場合も多い。作歌活動は、静岡大学教育学部国語教育専修の学生有志と、高齢者の方々が相互に支えあいながら進めたが、世代の異なる人々の間に、紐帯としての短歌・和歌を設定することで、双方の思考や言葉の紡ぎ方等に積極的な影響を期待できるものと思われる。また、日常とは異なる言語（短歌・詩等）で感情を表出する行為は、自身の内面との対話行為でもある。この活動を日常的に短歌・和歌を作る契機としていただくことで、心身共に健康な生活を送る上での一助となることが期待できる。

上記の活動ののち、最終段階として作品を歌集にまとめる作業を行う。編纂に際しては、奈良時代に成った『万葉集』を手本とした。同集は、様々な立場の人の歌を収める等、多様性を内包する歌集であり、編纂の参考とする上で最適と思われる。また、編纂活動と並行し、『万葉集』に対する各世代の認識の調査を進めた。教科書等にも戦前から途切れなく掲載される『万葉集』は、政治、文化、教育面に長く影響を及ぼしてきた。高齢者の方からこれまでご自身の受けてきた和歌教育の経験に関するお話を伺う機会を頂き、交流を行うとともに、万葉享受史の一端として記録に残すことも並行して試みた。

4、研究の成果

(1)当初の計画

◆令和七年度 短歌交流計画「繋ぐ 一世代と時をこえて」

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 8月6日 長尾川老人福祉センター | 8月19日 船越老人福祉センター |
| 8月19日 鯨が池老人福祉センター | 8月23日 清水老人憩の家・清開きらく荘 |
| 8月29日 清水南部交流センター | 8月29日 用宗老人福祉センター |
| 9月1日 蒲原老人福祉センター | 9月17日 由比交流センター |

(2)実際の内容（A：予定どおり）

(2-1)市内の各福祉施設における短歌交流

上記交流計画に従い、静岡大学教育学部国語教育専修所属学生が各福祉施設に訪問し、施設の利用者の方々との短歌作成交流を行った。

図1 各施設における交流の様子



船越老人福祉センター



長尾川老人福祉センター



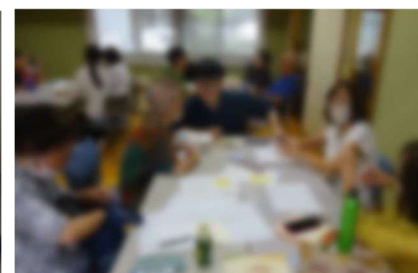
清水老人憩の家・清開きらく荘



蒲原老人福祉センター



清水南部交流センター



鯨が池老人福祉センター

(2-2) 歌集の作成

本年度の短歌交流の成果をまとめた歌集、『繋ぐ―世代と時をこえて―』を二二〇部作製し、参加者全員に配付。交流施設のほか、静岡大学附属図書館に寄贈した。歌集には、交流に参加した大学生と高齢者の短歌をテーマ別（「語り・紡ぐ」、「心のこえ」）に掲載したほか、過去の交流参加者の投稿歌、参加者の親族による歌、『万葉集』の歌々も掲載し、本年度のテーマ「世代と時をこえて」を体現できるよう工夫した。また、歌集の末尾には、各施設で実施した『『万葉集』に関するアンケート』（2-3 参照）に基づく調査報告を掲載した。

図2 歌集『繋ぐ―世代と時をこえて―』（部分）



(2-3) 『『万葉集』に関するアンケート』の実施

『万葉集』は、戦前より今日まで一貫して教科書に採録される希有な歌集である。したがって、世代間の認識や教室における扱いの変遷を追うことがある程度可能である。今回、施設の利用者の方々計一八〇名のご協力を得、『万葉集』をかつてどのように学んだのか等について、匿名アンケートの形式で調査を行った。調査に基づく成果の一部を「山部赤人の富士山詠」と題する小文にまとめ、歌集に掲載

する形で報告した。

(3)実績・成果と課題

本年度および過去四年間の短歌交流活動の成果の一つに、高齢者や地域の方々と大学生の交流のモデルケースの確立・提示が挙げられる。短い定型詩である短歌は、だれもが気軽に取り組むことができる一方、日常や感情を切りとり、定型音句に落とし込む作業は存外難しい。今年度の交流活動では、この「難しさ」を会話の契機としながら、異世代間の積極的な交流を促すことができた。

また、生まれた作品を互いに鑑賞することで、さらに豊かな交流をはぐくむことも可能である。特に、歌集として形に残すことで、交流の記憶や経験がその後長く生き続けることも改めて確認しえた。

以上、短歌は交流の場として有効である。と同時に、一人で楽しむことができる文芸でもある。歌を詠む行為自体は特別な準備や道具が必要なく、さまざまな場面、状況、目的への応用が容易である。本交流を契機として、趣味の一環として継続的に短歌に取り組む方も多い。誰もが自分のペースで楽しく取り組める社会参加のモデルとして、短歌交流活動は有効であろう。

(4)今後の改善点や対策

過去の交流活動においては、高齢者福祉施設への大学生の訪問だけでなく、高齢者の方々およそ百名を大学のキャンパスフェスタに招待する形で大規模に交流活動を行い、高い効果を挙げている（令和五年度）。今年度はそれらの実績を引き継ぐことができなかった。本年度は短歌交流「繋ぐ」の最終年度であるが、引き続き何らかの形で、継続していくことが望まれる。また、(3-3)で記述した、「『万葉集』に関するアンケート」については、「アンケートの内容が難しく、十分に回答が出来なかった」との指摘を多数いただいた。実際、回答欄の空白が多数見受けられたため、内容を改善の上、改めて調査の機会を得たい。

5、地域からの評価

令和三年から五年間継続した短歌交流については、実施先の各施設の方々、施設の利用者の方々より、有意義な活動であったとの評をいただいている。参加した静岡大学の学生は、貴重な体験であるとともに、高齢者と交流するなかで多くのあたたかい言葉をいただき、大変励まされたとの感想があった。

[附記] 本研究にご参加、ご協力くださいましたすべての方々に、心より御礼申し上げます。本研究は、元静岡大学教育学部教授・杉崎哲子先生が長年実践されてきた交流実践を引き継ぐものです。交流活動の実施、歌集の編纂等、杉崎先生に並みならぬお力添えをいただきました。

駅前活性化に向けた魅力ある空間づくり

静岡大学 人文社会科学部 専門演習d (行政学演習)

教 員：講師 山田 健

参加学生：川内 祐弥、北條 智子、藁科久美子

加藤 舞那、森 一恩、森口 楓子

石井 敦士、河原 勇翔、下重 零音

玉川 耕大、阿部 伎恩、伊藤 輝

加藤 佑哉、前田 浩行、森 将

1. 要約

本研究では、島田市役所が島田市商工会議所青年部とともに企画・実施していたアーバンスポーツを活用した形での島田駅前活性化の試みについて、公共空間の整備による中心市街地活性化を学んでいる「専門演習d」の学生の目線から実地的に調査・考察・分析することで、同市の試みをより有機的に展開するための知見を見出すことを目指した。具体的には、学生有志数名で市役所を訪れ同市職員にアーバンスポーツを用いた催事のヒアリング調査を実施するとともに、学生有志十数名で1泊2日の実地的な調査を通じて島田市の魅力を探求し、これらの調査で得られた知見を先行研究の成果もふまえながら考察することで、当該事業の課題と今後の発展可能性を見出すことを試みた。結果的には、当該事業には①空間の有効活用・②若者の定着と交流促進・③街のイメージ変革とシティプロモーション・④島田駅前の「挑戦の拠点」化という効果が生じうる一方、①アーバンスポーツ催事の継続／非継続基準の作成・②実証エリアの設定とルールメイキング・③アーバンスポーツ関連催事の定期開催・④官民運営協議会の設置といった点を要することを提言するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、島田市のアーバンスポーツを活用したまちづくり(特に駅前活性化事業)について、実地的に理解を深めた上で、学生の当事者視点からその可能性・課題・解決方策を検討し、その在り方を展望する点にあった。その趣旨とは、主に若年層が中心的な担い手となりうるアーバンスポーツについて、まさに当事者たる学生がまちづくりの知見を取り入れた上で当該事業を検討することで、市役所内部や商工会議所では図らずも抜け落ちてしまうような視点や論点を付加できないか、というものであった。

3. 研究の内容

私たちは、「駅前活性化に向けた魅力ある空間づくり」をテーマに、アーバンスポーツを利用した駅前の活性化について研究した。今回は、駅前商店街の活気が減少している・若者のエネルギーの受け皿がないといった課題があることから、アーバンスポーツによる駅前活性化に実証的に取り組んでいる、島田市の駅前商店街を研究対象としている。

まず、11月8日(土)に、島田市の駅前商店街で行われた「URBAN SPORTS CAMP」というアーバンスポーツを体験できる催事を見学した。また、この催事と同時に開催されていた「島田産業まつり」にも参加し、両催事の来場者の特徴や盛り上がりを感じることができた。さらに、出店者や市役所の職員の方にインタビューを行ったことで、商店街の歴史や普段の活気、抱える課題などについて知ることができた。

翌11月9日（日）には、島田市の商業施設「KADODE OOIGAWA」を訪れ、同施設の職員に設立の経緯や営業の様子の説明をふまえた上で、施設内を見学した。KADODEで提供される島田の茶文化に感じ入ったことはもちろんのこと、一定の誘客が見込めるKADODEでの催事展開にも可能性が潜在するよう感じられた。また、KADODEと学生を有機的につなげ、いわゆる「産官学」の連携関係を構築する余地も存在するよう感じられた。

次に、合宿を踏まえて、駅前商店街でアーバンスポーツを行う価値について考え、次の3つの価値があるという結論に至った。1つ目は、若年層・新規来街者を誘引できるということである。島田市出身の有名選手もいることから、SNSによる発信なども活用すれば、若年層や新規来街者を誘引できるのではないかと考えた。2つ目は、既存インフラを有効活用できるということである。アーバンスポーツは、「都市構造物」をそのままフィールドとして利用したり、高架下などの未利用空間を活用したりすることができる。島田市の場合、土日の市役所駐車場や駅前広場をアーバンスポーツに活用できる可能性があると考えた。3つ目は、年齢・性別・経験を問わず、様々な人が交流できるということである。このようなインクルーシブな特性を持つことから、アーバンスポーツは、新しい「居場所」の創出につながると考えられる。

最後に、以上のことを踏まえて、アーバンスポーツによる駅前活性化を進めるためにどのようなことをしていく必要があるかを考え、提言をした。提言は3つあり、いずれも、他都市の公共空間活用事例や、海外の若者拠点づくりの事例を根拠としている。1つ目は、「パブリック・ストリートへの転換」である。具体的には、モジュラー式（可動式）の構造物やベンチを使用することや、地元の小中高生に競技用具のデザインを考案してもらうことなどを考えた。2つ目は、「ノイズ（騒音・マナー）への対応」である。島田駅前が住宅街付近に位置し、騒音問題は避けられないということから、イベントの実施や市役所駐車場の休日解放が現実的だという結論に至った。3つ目は、「ソフトルールによる“共創”」である。具体的には、利用者の参画によるマナー啓発や官民連携の運営協議会設置などが考えられる。島田市の現状として、アーバンスポーツによる駅前活性化がまだ実証段階であるため、官民連携ということまで事が進んでいない。本格的に取り組むことになった場合、官民連携に加えて、「市民」主導で進めていくのが理想的であると考えた。

私たちは、アーバンスポーツによる駅前活性化には、空間を有効活用できる・若者が定着し交流が促進する・街のイメージが変革し、シティプロモーションになる・島田駅前が「挑戦の拠点」になる、という4つの効果が生じ得ると考えている。そして、そのための次のステップとして、アーバンスポーツ催事の継続／非継続基準の作成・実証エリアの設定とルールメイキング・アーバンスポーツ関連催事の定期開催・運営協議会（官民）の設置などを行うべきだということを、研究の結論とした。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

当初の計画では、島田市役所・島田市商工会議所より現地にて説明を受け、当該問題への解像度を高めた上で、文献調査にも取り組み、実地的・理論的な知見をふまえながら島田市の事例分析を展開することとしていた。具体的には、10月にフィールドワークを実施した後、11月から12月にかけて検討作業にあたり、その中間的成果を学内の「ゼミ成果報告会」にて報告し、同会で得られた示唆をもとに、1月から2月にかけて内容を加除修正することとしていた。

(2) 実際の内容

A：予定通り

計画に記載した通り、複数回、日帰りで島田市役所を訪問して担当の市職員より説明を聞くことがで

きた。また、アーバンスポーツ分野の中心的な先行研究である清水麻帆『スケートボード資本論：アーバンスポーツは都市を再生させるか』（水曜社、2023年）などを輪読した上で、1泊2日のヒアリング調査を実施することができ、その成果をふまえて検討作業を進め、中間的成果を学内の「ゼミ成果報告会」にて報告することができた。

(3) 実績・成果と課題

一連の調査・考察・分析の中間的成果について、島田市役所を訪れ、同市の担当職員2名および同市商工会議所青年部のメンバー2名に対して説明したところ、おおむね肯定的な評価をいただいた。「大学等の研究の成果の還元を図り、もって都市圏の発展に寄与する」という本助成事業の目的は、研究成果を島田市の官民のアクターに知見を伝えることができ、その営みを肯定的に受け止めていただいたという点で、達成したと言えよう。

他方、当該研究の過程で、アーバンスポーツを用いた市街地活性化事業について、学生自らが立案・実施する案も浮上した。とりわけ、アーバンスポーツが多様な若年層に楽しめるコンテンツである強みを生かして、婚活事業に活用することが想起され、催事の実現を模索した。

しかし、アーバンスポーツのレクチャーが可能な選手の招聘などで数十万円単位の経費を要することが判明し、本研究での実践は断念せざるをえなかった。これは、本助成事業にて支出される金額が30万円にとどまっており、その額の多くを研究に利用することが期待されていることに鑑みれば、致し方ないことと考えられる。

むしろ、今後事業を発展させる上での可能性を示唆したという点で、評価されるべきであろう。

(4) 今後の改善点や対策

第一に、参加学生が見出した通り、どうしても官民関係上の課題に向き合うことは避けられない。アーバンスポーツによる中心市街地活性化事業では、催事にたずさわる企業や施設管理者への対応はもちろんのこと、スポーツで生じうる騒音や渋滞に不満を抱きうる地域住民にきめ細かく配慮した上で、さらには地域内外の参加者をいかに管理するのが問われる。

この課題に対して、参加学生は官民連携の運営協議会設置を構想していたものの、その種の会議体を設置するだけでなく適切に作動させることまで検討しなければならないであろう。いかに実質的に機能させるのか、人員・参加団体・頻度・趣旨・議題の枠付けなどを工夫することが求められる。

第二に、アーバンスポーツの限界である。アーバンスポーツは、参入障壁が低く多様な社会階層にとって参加可能で、幅をとらずにコンパクトな都市空間の隙間でも実施できるものの、まだ市民権を得ていないため、単一事業だけで人流を惹きつけることができない。また、中心市街地では既述の騒音や渋滞問題の発生を避けられないため、都市空間から離れた地域での事業展開が望ましいことも想定される。たとえば、浜松市は中心市街地から離れた舞阪地区にてアーバンスポーツの拠点を整備した（『静岡新聞』）。島田市でも、島田球場付近でのアーバンスポーツ実施案は浮上しており、浜松市のように遊休地を活用することは一案であろう。

この課題に対しては、参加学生も指摘していた通り、短期的には催事の複合化が、中長期的には施設の多機能化が、それぞれ求められる。あくまでもアーバンスポーツをコンテンツの一部としながら、他の事業や機能と組み合わせることで、公共空間にはより多様な社会階層の住民をより広く集めることができるはずである。

第三に、アーバンスポーツの持続可能性である。アーバンスポーツは、これまでふれたように中心市街地活性化や遊休地の再開発にとって魅力的なコンテンツであるものの、スポット的な催事を実施するにあたって相当程度の費用負担が生じる。もちろん、ひとたび公共空間を利用することや講師を招く

ことによる費用負担は市の予算に比してさほど大きいものではないかもしれないが、それでも日常的に開催するとなれば、その費用がかさむことは避けられない。

この課題に対しては、地域の中でアーバンスポーツの担い手を養成することが求められる。たとえば、公立の初等・中等教育学校の体育科授業や特別プログラムにアーバンスポーツを導入して取り組む時間を増やす、あるいはアーバンスポーツの催事で「レク」の時間を設けることで若年層が（アマチュア的でこそあれ）スポーツの在り方一式を教えられるようにすることである。このような取り組みを経て、学生の中にアーバンスポーツを自分ごととして楽しみながら地域の方々へ伝えられる存在を育て上げることで、当該事業はようやく自走することが可能となる。

5. 地域への提言

これまでに記述した本研究事業の提言は、島田市役所や島田市商工会議所へ向けたものであった。すなわち、それは島田市役所や島田市商工会議所に対して、①パブリック・ストリートへの転換、②ノイズへの対応、③ソフトルールによる“共創”といった点を求めた。

より広く「地域への提言」をまとめるとすれば、前述の「本格的に取り組むことになった場合、官民連携に加えて、『市民』主導で進めていくのが理想的」という見立てからしても、地域住民に対して主体的な関わりを求めるものとならざるをえない。いくら官民の組織が前のめりに動いたとしても、そこについていく住民が存在しない限り、中心市街地活性化が中長期的には成功しえないであろう。

もっとも、島田市のような中規模の都市で、この種の公共空間を活用することは決して容易ではない。最新の研究によれば、地方自治体に対して住民が一定程度の行財政能力を認めている地域では、公共施設の統廃合を肯定的に判断する傾向にある（柳至『公共施設の統廃合を合意する』有斐閣、2025年）。この成果からすれば、島田市民が新しい公共空間に対して能動的な態度を示すためには、より丁寧な説明を提供することもさることながら、より生活に密着した形でその必要性を提示することが求められるであろう。

6. 地域からの評価

本事業での地域との関わりは、あくまでも島田市役所・島田市商工会議所・KADODE OOIGAWAの三者にすぎず、地域住民と密接な関係を構築したわけではないし、私たちの活動を地域住民に対して声高に訴えたわけでもない。その意味で、地域からの評価を試す機会はお世辞にも豊かとは形容しがたい。

とはいえ、本事業を通じて、学生の目線から島田市役所や島田市商工会議所に対して、アーバンスポーツへの取り組みに対する一定程度の知見や所感を提示できたことは小さくない収穫にはかならない。私たちが伝える情報が島田市役所や島田市商工会議所に有効活用され、その結果として、市や商工会議所の取り組みが質量ともに磨かれることになれば、いずれ地域からの評価を得ることにつながるであろう。

また、本事業を実施した学生がいずれも市外出身者であることに鑑みれば、彼・彼女たちが島田市の魅力にふれる機会を作り出せたことを副次的な効果として、認めることが可能となろう。これを機に、彼・彼女たちが島田市との関係性を深めることとなれば、その動向を通じて地域からの評価を受けることもあるかもしれない。

最後に、お忙しい中にもかかわらず、本事業にご協力くださった、島田市役所市長戦略部戦略推進課の大石寿宏さん・曾根翼さん、島田市商工会議所の木戸佑輔さん・松本高明さん、KADODE OOIGAWAの野田忠志さんに、改めての御礼を申し添えたい。

静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡大学 情報学部 永吉研究室

教 員：教授 永吉実武

参加学生：峯重奏斗、森峻馬、大谷愛奈、上久保優斗、村田穰

1 要約

静岡県立川根高校では、地元出身生徒に加えて県外からの川根留学生を受け入れ、地域との関わりを重視した教育活動を展開している。本事業は、こうした地域密着型教育をさらに深化させることを目的に、川根本町を題材とした地域データ活用型の探究学習を実施したものである。近年、高等学校では教科「情報」の必修化により、ICT活用力やデータリテラシーの育成が重要視されており、地域の実データを用いた課題発見・解決型学習は、将来のキャリア形成に資する実践的能力の涵養に直結する。

本事業の目的は、①高校生が川根本町の現状・課題・魅力を主体的に探究し、地域理解と愛着を深めること、②データ分析を通じて社会で求められる思考力・実践力を育成し、進路意識の醸成につなげること、③地域・大学・行政が連携した教育モデルを構築し、地域の魅力発信を図ることである。川根高校の授業と連動し、静岡大学情報学部永吉研究室の学生が参加して、地域データの収集、分析、成果発表までを段階的に実施した。地域関係者との対話を通じて学びを深化させるとともに、地域連携型情報教育の先進事例として、今後のモデルとなる意義を有する取り組みである。

2 研究の目的

本事業は、令和7年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業の一環として、「静岡県立川根高校の魅力向上」を目的に実施されたものである。令和6年度に引き続き、川根高校の教科「情報I」の授業と連動し、静岡大学情報学部・大学院との高大連携による実践的な探究学習を展開した。具体的には、静岡大学大学院総合科学技術研究科情報学専攻修士課程1年生・峯重奏斗によるアンケート調査やデータ分析の方法・視点に関する模擬授業を通じて、本プロジェクトの目的や分析の基礎を理解した上で、生徒と大学生が共同で川根高校周辺地域のフィールドワークおよび地域住民（定住者・移住者）へのインタビューを実施し、地域理解を深めた。さらに、川根本町の観光に関するアンケート調査から得られた定量データの分析を行い、相互発表および地域住民への成果発信を行った。加えて発展的取り組みとして、川根本町の観光広告と他地域の事例を比較分析し、広告戦略に関する提言を行うプレゼンテーションを実施した。これらの活動を通じて、高大連携の推進、データサイエンス教育の実践、キャリア教育の充実、大学生の実践的学習機会の創出、生徒の学習意欲向上、そして川根高校における特色ある教育プログラムの構築を総合的に目指したものである。（図1参照）（次ページ）

3 研究の内容

研究内容1：インターネットアンケートを通じて収集された川根本町の観光に関するデータ、および川根高校周辺地域のフィールドワークとインタビューを通して収集された定性データを分析し、川根本町の観光活性化策を考案・提案する

研究内容2：川根本町の観光PR広告の特徴と他地域のそれとの比較を行い、川根本町の観光PR広告方法に関する提言を行う

4 研究の成果

研究内容1（川根本町の観光に関するデータを分析し、観光活性化策を考案・提案する取り組み）について

(1)当初の計画

本取り組みに際し、静岡大学大学院総合科学技術研究科情報学専攻の大学院生が、川根高校の教科「情報I」の授業においてイントロダクション（導入）を実施する。

その後、①-1 生徒と大学生が共同で川根本町および周辺地域への理解を深めるためのフィールドワークを行い、①-2 インターネットアンケート（外部委託）により川根本町の観光に関する定量データを収集する。② 生徒と学生がグループワーク等を通じて個別にデータ分析を行い、③ 分析結果の比較・考察を行う。④ その成果を生徒同士および地域住民等に対して発表し、これら一連の過程を通じて高大連携による交流を図る。

さらに、活動全体を振り返り、成果を整理するとともに、次年度以降の活動への示唆を得ることを計画した。

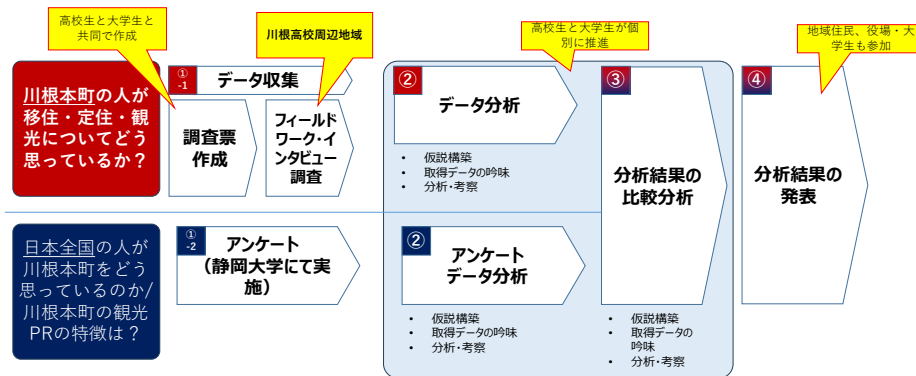


図1：研究計画

(2)実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

①. 静岡大学関係者によるイントロダクションの実施(2025年9月25日) 【A：予定どおり】

2025年9月25日（水）13:20～15:10の「情報I」の授業において、静岡大学大学院総合科学技術研究科情報学専攻修士課程1年生・峯重奏斗が「インタビュー調査講座」と題した講義を行い、アンケート調査やデータ分析の方法、分析視点、調査の目的と意義について解説した。あわせて本事業の全体計画を説明し、川根高校生徒と静岡大学情報学部の学生による交流を行うとともに、2025年10月6日に実施するフィールドワークの計画を作成した。



②-1. フィールドワークおよびインタビューの実施（2025年10月6日）【A：予定どおり】

川根高校生徒と静岡大学情報学部等の学生が4グループに分かれ、川根高校周辺（徳山地区）の神社、商店、文化施設等を対象としたフィールドワークを実施するとともに、地域住民（定住者5名、移住者4名）へのインタビュー調査を行い、地域への理解を深めた。

②-2. インターネットアンケート調査の実施(2025年8月22日～24日／2025年8月29日～30日) 【A：予定どおり】

株式会社アイブリッジの調査サービスFreasyを用い、日本全国6ブロック、計6,000名（各ブロック

1,000名)を対象に川根本町の認知調査を実施した。さらに、川根本町への来訪経験があると回答した150名を対象に、観光体験の満足度等に関する追加調査を行った。

③. データ分析および比較・考察(2025年10月7日～12月14日) 【A：予定どおり】

フィールドワークで得られたインタビューデータおよびアンケート調査データを、Microsoft Excel や統計解析ソフトウェア等を用いて分析し、川根本町観光の現状把握および課題抽出を行った。さらに、生徒の発案に基づき、観光活性化策の検討・立案を行った。

④. 成果発表会の実施 (2025年12月15日) 【A：予定どおり】

2025年12月15日(月)13:00～15:00の「情報I」の授業において、川根高校生徒24名がポスター発表を行った。あわせて、峯重奏斗が川根本町の観光広告と他地域の事例を比較分析し、広告戦略に関する提言を行った。当日は、川根高校および静岡大学関係者に加え、地域住民、川根本町議会議員、町役場職員等、約20名が参加した。



⑤.活動の振り返りと成果のとりまとめ(2026年2月26日)(場所:静岡大学浜松キャンパス) 【A：予定どおり】

2025年度の活動全体を振り返り、実施成果の評価を行うとともに、次年度に向けた改善点および実施計画の概要について協議した。(参加者：川根高校「情報I」担当教諭：1名、静岡大学教員：1名、静岡大学学生：3名)

研究内容2(川根本町の観光PR広告の特徴と他地域のそれとの比較を行い、川根本町の観光PR広告方法に関する提言を行う)について

(1) 当初の計画

- ① 川根本町における観光PR戦略の特徴を把握することを目的としてアンケート調査を実施する。
- ② 川根本町以外の観光地における広告・PR戦略についても同様のアンケート調査を行い、①の結果との比較を行う。
- ③ 収集した定量データに対して統計分析を行い、地域間の差異や共通点を明らかにする。
- ④ 分析結果を川根高校における成果発表会にて報告する。

(2) 実際の内容 (Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など)とその理由

- ①・② 川根本町および他地域の観光PRに関するアンケート調査として、地域観光に関するスクリーニング調査(2問・9,000サンプル)および本調査(1問・450サンプル)を実施した。
 - ③ 収集された定量データに対して統計分析および地域間比較を行い、川根本町の観光PR広告の特徴を抽出するとともに、今後の観光広告・PR戦略の方向性について示唆を得た。
 - ④ これらの分析結果を、川根高校での成果発表会に先立ち、高校生、川根本町(元)町議会議員、町役場職員、地域住民、川根高校教員・生徒に対して報告した(2025年12月15日)。
- 以上の取り組みは、当初計画どおり実施された【A：予定どおり】。

(3)実績・成果と課題(研究内容1および2を総合して記載)

本取り組みには、静岡県立川根高等学校1年生24名(教科「情報I」)、静岡大学情報学部等の学生5名

(大学院生を含む)、川根高校教諭7名（フィールドワーク協力者、授業実施協力者を含む）、および静岡大学教員1名が参加した。

昨年度に引き続く本事業を通じて、川根高校の生徒は、データサイエンスを用いて社会や地域の課題を発見し、解決策を検討する意義に触れる貴重な機会を得たと考えられる。特に、川根高校周辺地域におけるフィールドワークや、地域住民（定住者および移住者）へのインタビュー調査を実施したことにより、地域の現状や課題に対する理解と関心が一層深まったと考えられる。その成果として、最終発表会には多くの地域住民や関係者が参加し、学校と地域との新たな対話の場が形成された。

少子化・人口減少の進行により川根高校の生徒数が減少傾向にある中で、地域の活力と魅力を維持・向上させる上で、高等学校が地域に存在し続ける意義は極めて大きい。そのためには、特色ある教育プログラムを通じて生徒の地域への愛着を醸成し、将来的な定住や関係人口の創出につなげていくことが重要である。本研究では、静岡大学の学生が第三者の立場から川根本町の観光PR戦略について提言を行っただけでなく、川根高校の生徒自身が主体的に観光活性化策を検討した点に大きな意義があるといえる。

(4)今後の改善点や対策（研究内容1および2を総合して記載）

データ分析を中心とする学習活動では、分析手法の習得や作業そのものが目的化し、得られた結果の解釈や考察が十分に行われにくいという課題が生じやすい。しかし本取り組みでは、統計的手法による定量分析に加えて、フィールドワークやインタビュー調査を組み合わせることにより、数値が示す意味を文脈の中で理解し、地域の実態と結び付けて考察することが可能となった。

また、昨年度に試行的に実施した授業構成、フィールドワークの方法、成果発表会の運営を今年度も踏襲したことで、より円滑かつ質の高い実施が可能となった。今後は、これらの手法や運営ノウハウを体系化・標準化し、本事業に直接関わっていない教員や学校においても再現可能な教育モデルとして展開できるよう、教材化やマニュアル整備を進めることが課題である。

5 地域への提言

過去の報告書においても指摘してきたとおり、高等学校において教科「情報」が必修化され、その内容が将来社会で活躍する上で不可欠な基礎的能力であることを踏まえると、データ収集、統計手法を用いた分析、そして分析結果の解釈という一連のプロセスを早期に身に付けることの重要性はますます高まっている。地域観光を題材としたデータ分析に取り組み、川根本町の現状や魅力、さらには将来の可能性を発見・理解する学習活動は、そのための極めて有効な実践の場であると考えられる。

本取り組みは、このような教育的意義および地域的意義の双方を有することから、単年度で完結させるのではなく、継続的に実施し、内容の改善と高度化を重ねながら地域に定着させていくことが望ましい。

6 地域からの評価

高校生と大学生が協働しながら教科「情報Ⅰ」に関連する実践的な学習活動を行うことは、生徒の関心や学習意欲の向上につながるなどの評価が得られている。特に、静岡大学情報学部との連携により、「情報Ⅰ」の学習内容をより専門的かつ実践的に深化させることができた点について高い評価があり、来年度以降も継続して実施したいとの意見が寄せられている。

また、昨年度に確立した模擬授業、フィールドワーク、生徒・学生交流、成果発表会といった一連の研究・授業手法が今年度も踏襲され、安定的に実施できたことから、こうした高大連携型の学習モデルを他の分野や地域にも展開していきたいとの期待も示されている。

外国人住民の住みやすさ向上に関する研究
(川根本町 経営戦略課 まちづくり推進室)

静岡大学 人文社会科学部 漢語使 (研究室)

教員：張盛開

アドバイザー：名倉仁美

参加学生：何俊文、張沢宇、グエン ティ トゥ メン、謝佳瑶、遊天一、
柴田南帆、Nguyen Thu Trang、Tran Xuan Hieu、May Nan Htike

1. 要約

本事業では、川根本町の外国人住民の生活向上を図るため、町内で生活・就労する外国人住民(技能実習生を含む)と、受入企業・日本人職員の双方に対して聞き取り調査を行った。調査結果を日常生活・職場コミュニケーションで生じやすい「不便さ」を場面別に整理した。

その結果を踏まえ、行政手続・医療・生活マナー等に関する情報を、やさしい日本語を基軸に多言語へ展開し、現場で使える表現や配布方法・掲示場所まで含めて提案した。

調査→整理→資料化→フィードバックのサイクル(聞き、書き、語り)をつくることで、外国人住民の安心感向上、および受入側(町内の行政や会社など)の対応の負担軽減を同時に図ることを目指した。

2. 研究の目的

- ① 外国人住民を対象に現状とニーズを調査し、問題点を明らかにする。
- ② 外国人住民と共に生活する日本人を対象に外国人住民に対する要望や行えるサポートを調査し、解決法を提案する。
- ③ 外国人住民の住みやすさ向上のために、生活に役立つ資料を多言語版で作成する。

3. 研究の内容

川根本町に在住・就労する外国人住民および地域の日本人(雇用主・同僚等)を対象に、生活上の不便さと情報入手の実態を把握するためのフィールドワークを実施した。

〔調査方法〕役場担当者との事前協議を踏まえ、半構造化インタビュー(共通質問+個別深掘り)を中心に聞き書きを行った。主なテーマは、交通手段・買い物・医療受診・行政手続き・災害時の情報取得、ならびに既存案内の分かりにくさ(言語・表記・情報量・移動手段)などである。

〔整理・分析〕合宿中に聞き書きを行い、合宿終了後にテーマ別の課題を抽出した。外国人住民側のニーズと、支援側(会社・行政)の認識の差も合わせて整理した。

〔成果物作成〕調査結果を踏まえ、気軽に町内を移動できるデマンドタクシー「お出かけ号」のチラシを多言語化した。結果として7言語版(中国語(簡体字と繁体字)、ベトナム語、英語、ミャンマー語、タイ語、インドネシア語、韓国語)を作成した。

また、元の日本語原稿は外国人にとって理解しにくい面があるため、まずはそれをある程

度の日本語力で読める「やさしい日本語」版に整えた。その上で多言語で翻訳し、各言語の協力者による校閲（語彙、表記ゆれ、地名・固有名詞の統一）を経て版下に反映した。

資料の作成においては、役場窓口や公共施設、関係機関での掲示・配布を想定し、利用場面が一目で分かるようレイアウトと情報量を調整した。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

5月：多文化共生アンケートを実施開始。

6月：前年度の実績と課題を踏まえ、申請書を作成する。

7月初旬：静岡大学にて川根本町役場経営戦略課の担当者、大学担当者と今年度の事業内容について打ち合わせを行い、フィールドワーク合宿で聞き書きを行う意向を示す。

7月下旬：宿泊先とのスケジュールを調整と確認、合宿の予算を計算する。

8月：川根本町役場の担当者と宿泊先と合宿のスケジュールを確認し、フィールドワークのプログラムを決める。

9月：2泊3日のフィールドワークを行い、住民への聞き書きや住民の生活を体験する。

10月：フィールドワークを振り返り、「お出かけ号」と「町内バスマップ」の多言語版チラシを作成する

11月：日本語版の「お出かけ号」チラシを貰い、その内容を excel に入力してデータ化する。

12月：静大に在籍する外国人留学生に依頼し、上記の excel を元に「お出かけ号」の多言語版に翻訳する。

1月：翻訳した内容をチラシの該当箇所に貼り付け、各言語の担当者に校閲してもらう。

2月：デマンドタクシー「お出かけ号」7言語版を役場に提出し、研究成果報告書の作成および提出。

(2) 実際の内容

5月～7月（A予定通り）：今年目標を設定し、合宿の予算やスケジュールを確認できて、申請書を提出した。

8月～9月（A予定以上）：合宿フィールドワークはスケジュール通り実施し、初日に対象者に合わせて英語と日本語で聞き書きを行った。2日目では聞き書きの成果を副町長に語った。

3日目は役場を訪問し、くらし環境課の方と打ち合わせをし、お出かけ号の多言語版作成の緊急性を確認した。また、事業の成果及び今後の方向性について町長に語った。

10月（B一部修正）：理由は「町内バスマップ」の作業は予定より多く、参加者全員は文字化に集中するため、緊急性の高い「お出かけ号」の多言語版チラシのみを作成することにした。

11月（A予定以上）：日本語版の「お出かけ号」チラシの内容を excel 化した。また、元の日本語原稿は理解しにくいいため、「やさしい日本語」版に整えた。

12月（B一部修正）：理由はフランス語協力者が見つからないため、フランス語を除く7言語版を作成することにした。

- 1月（A予定以上）：翻訳した資料でチラシを作成し、翻訳協力者に再度内容や構成を確認してもらった。更に、役場の担当者と大学の担当者を交えて合宿のフィールドワークの成果発表会を行った。
- 2月（A予定通り）：デマンドタクシー「お出かけ号」7言語版を役場に提出した。研究成果報告書作成し、提出した。

(3) 実績・成果と課題

調査研究の成果として、川根本町は不便さがあるが、それを上回る魅力（自然・人・体験）が「住み続けたい意欲」を支えていることが判明した。住民たちの交流は受け身では増えにくい一方、町内の施設やサービスを利用する際にも不便である。住民たちの住みやすさ向上のため、関連資料の多言語版の作成が必要不可欠である。

町内での合宿を通して、住民と同じように公共交通機関を利用して買い物を体験した結果、バス本数の少なさ、スーパー・コンビニまでの遠距離があるため、免許を持たない人の不便さを実感した。特にバスの乗降車方法は特別（整理券がない）で、日本人はともかく、日本の生活に慣れている留学生調査者も間違えるほどだったので、慣れていない外国人住民にとっては更に厳しいと予想できる。

町内では、「お出かけ号」というデマンドタクシーサービスがあるものの、電話対応しかできず、利用案内も日本語版しかない。「お出かけ号」の多言語版があれば町内の外国人住民に利便性をもたらせるという意見が聞き書きを通じて頂いた。

他にも、合宿で外国人住民への聞き書きを通じて以下の意見を頂いた。

① 川根本町の魅力

- ・ 溪谷・吊り橋・山と川、温泉、季節の景色など価値が深まる資源が豊富。
- ・ 初対面でも挨拶、困ったときの具体的支援（買い物の手助け等）。
- ・ 外国人にも比較的開かれており、町内のイベントに参加すれば良好な関係が築けるとい
う評価が一貫している。
- ・ 近所から野菜を分けてもらえること。（分かち合いの経験）

② 暮らしにくさ

- ・ 歯科などの探しにくさ、場所・時間・言語対応への不安。例えば、富山県の歯医者に通
っている人がいる!!
- ・ 山道の運転は注意が必要、移動の心理的ハードルが高い。

言語対応への不安を持っているため、漢使研で作成した多言語資料は、大いに活躍すると予想できる。本プロジェクトでは、中国語（簡体字と繁体字）、ベトナム語、英語、ミャンマー語、タイ語、インドネシア語、韓国語の7言語のお出かけ号チラシを作成した。これにより、今後外国人住民は気軽に「お出かけ号」デマンドタクシーを利用し、町内でより便利の生活を送れるようになる。自然と外国人住民の暮らしやすさ向上が図れる。

③ 観光と居住をつなぐ可能性

- ・ 人口を増やすには「働く場所（雇用）」を増やす必要があるという意見がある。
- ・ 観光客の「一晩だけ」の滞在は地元の美しさを十分に味わえなく、長く滞在してこそ楽し

める価値がある。

合宿以外にも、多文化共生の必要性や外国人対応の経験について、静岡大学に在学する大学生およびオープンキャンパスで来学した高校生を主な対象としてアンケート調査を実施した。調査期間は2025年5月から2026年1月までで、計240名から回答を得た。

回答結果によると、外国人対応の際に外国語が役に立ったと答えた学生が多かった。一方で、半数以上が外国人と接する際に困難を感じていると回答しており、その主な理由は言語の壁であった。また、国際交流イベントへの参加経験がある学生は少ないものの、「参加してみたい」「外国人と友達になりたい」といった前向きな意欲を持つ回答者は半数以上にのぼった。背景として、気軽に参加できる国際交流イベントが少ないことが推察される。以上の結果から、漢使研が提案しているような、学生が気軽に参加できる国際交流イベントの増加は、多文化共生の促進に向けた有効な改善策となると考えられる。

(4) 今後の改善点や対策

本年度の調査は合宿的に集中したため、準備（対象者選定・質問設計）、実施（通訳体制・記録）、考察（データ整理・分析）の各段階で十分な時間を確保できなかった。次年度以降は、以下の点を改善し、調査の精度と成果の継続性を高めたい。

- ① 事前計画の前倒し・役割分担の明確化：4～5月の段階で年間スケジュール、担当（調整／聞き書き／翻訳／デザイン／校閲）を確定し、合宿前にオンラインで進捗確認を複数回行う。メンバーの出欠・移動手段を早期に把握し、欠員が出た場合の代替体制も用意する。
- ② 調査設計の改善：対象（外国人住民・受入企業・近隣住民）ごとに質問票を再設計し、重要項目（交通、医療、買い物、行政手続、災害、交流）を共通質問として固定する。事前に試行調整を行い、質問の順序・言い回しを調整する。なお、網羅的にデータを集めるため、これまで調査できなかった外国人住民（ベトナムやフィリピンなど）や一般の日本人住民の聞き書きが必要である。
- ③ 記録方法・機材準備の標準化：録音・撮影の同意手続を事前に整備し、当日はチェックリスト（機材、予備バッテリー、記録用紙、同意書、翻訳メモ）に基づいて運用する。機材の設置・音量確認は出発前に練習し、記録の欠落を防ぐ。
- ④ 通訳・言語支援体制の強化：日本語が十分でない聞き書き対象者に対しては、母語話者／準母語話者の同席、あるいはオンライン通訳を組み合わせ、聞き書きの精度を上げる。質問の提示は「やさしい日本語」を基本とし、必要に応じて多言語で補足する。
- ⑤ データ整理・分析の効率化：聞き取り後1週間以内に文字起こし／要点整理を行い、共通のフォーマット（属性、主要テーマ、具体的不便さ、既存の工夫、必要な支援）でまとめる。テーマ別にコード化して比較し、提言の根拠を明確にする。
- ⑥ 多言語資料の運用・更新：作成した多言語チラシは配布先（役場、企業、宿舎、公共施設）を明確化し、掲示後の利用状況・理解度を簡易に確認する（短いアンケート、口頭確認）。内容は毎年度の制度変更に合わせて更新できるよう、原稿・用語集・デザインデータを共有し、責任を持って保管する。

5. 地域への提言

アンケートおよび聞き書きの結果から、外国人住民が地域で安定して生活・就労するためには、①言語支援、②日常生活情報へのアクセス、③地域交流の機会、④移動手段の確保が鍵となる。

まず、外国人住民の日本語力向上は基盤である。今回の聞き書き調査では、日本語で対応できる人はわずか3割である。改善のため、行政・企業・地域が連携し、勤務形態に合わせた日本語学習機会（短時間講座、オンライン併用、職場で使う専門用語などの教材化）を整備することが望ましい。同時に、受入側の日本人従業員に対して「やさしい日本語」の研修や基本的な外国語表現の学習機会を設けることで、現場での伝達ミスが減らせる。

次に、外国人と日本人の交流は依然として限定的である。勤務時間外に参加しやすい小規模な交流（料理会、スポーツ、地域行事への同伴、子育て・生活相談を兼ねた集まり等）を継続的に実施し、親しみやすい関係をつくる仕組みが必要である。

さらに、行政手続・医療・防災・交通など生活に直結する情報を、多言語・やさしい日本語で一元的に提供する（掲示物、QRコードでの案内、用語集の整備）。特に交通については、バスの本数・接続の見直しに加え、多言語版時刻表や乗り案内の整備により、外国人だけでなく高齢者を含む住民全体の利便性向上につながる。今年度にできなかったバスマップの多言語版の作成は次年度の課題となる。

6. 地域からの評価

本年度は、調査と資料作成を並行して進めたため、評価は「成果物の有用性」と「現場での使い勝手」に焦点を当てて整理した。

役場の担当者からは、同一内容でも言語の壁が下がることで回答・相談がしやすくなり、現場対応の見通しが立てやすい点が評価された。また、用語や表現をやさしい日本語に揃えたことで、将来的な改訂・追加がしやすいとの意見があった。提供した多言語お出かけ号に対するコメントは以下の通りである。

お出かけ号の多言語版案内をご提供いただきありがとうございます。担当課となりますくらし環境課に共有させていただいたところ、役場だけではできなかったことと、非常に喜んでおりました。

コメント通りでお出かけ号多言語版チラシの評価は高かった。

外国人住民側からは、母語で確認ができるので安心して質問ができ、聞き書きの深さが増したという反応が見られた。一方で、資料は「配布するだけ」で終わらせず、入社・入寮時の説明、掲示、定期的な再周知など、運用面の工夫が今後の課題として挙げられた。

7. 参考資料

参考資料として、デマンドタクシーお出かけ号の翻訳資料、出来上がったチラシの中国語版とタイ語版、聞き書き実施時の写真と多文化共生アンケート結果（一部）を添付する。さらに詳細な情報は漢使研のホームページ (<https://www.shizuoka.ac.jp/hanyushizhe>) を参照されたい。

①多言語版 excel (一部)

番号	日本語	中国語	ベトナム語	タイ語	英語	インドネシア語	ミャンマー語	韓国語
①-1	【ご利用に際し】(乘车须知)	Những lưu ý khi sử dụng thị ai cũng có	ບຸກຄົນ	Any resid	[Permohonan Mengenai P	အသုံးပြုသောအခါ စေ	이용 시 주의사항	
①-2	・町民の方(只要是川越	只要是川越	khám, bưu	คน	any resid	Semua penduduk kota bisa	မြို့အတွင်းနေထိုင်သူ များ	지역 주민이라면 누구나 이용가능합니다.
①-3	・商店、神社(上车或下车	上车或下车	diện, cửa tiệm, (bát cừ đũa	ศาลเจ้า เป็นต้น) ะ ข้าง	Either th	salah satu tempat umum (stasiun, kantor pemerintahan, JA, klinik, dari rumah, turun di	အတတ်အဆင့်ပြုလုပ်	탑승장소 또는 하차장소 중 한 곳은 공공장소로 정해주시요 (역, 신사, 寺
①-4	例えば… 自例如: 从自	自例如: 从自	điểm công	ต้น	For exam	"tempat yang bersifat	ဥပမာ သင့်အိမ်မှ စီနန်း	예를 들어 자택에서 탑승하는 경우, 상기의 공공장소에서 하차합니다.
①-5	公共の場所(如果是从	如果是从	điểm nào	คองการ	If boardin	Jika naik dari "tempat yang	အများပြည်သူဆိုင်ရာ	공공장소에서 탑승하는 경우, 어디든 하차가능합니다.
①-6	・指定の若(您指定的	您指定的	đôi vé địa điểm	จุดขึ้นรถ	Please n	Jika ada lokasi yang tidak	ထိုင်စီနန်းလိုပါသောနေ	지정하신 장소에 따라 탑승 또는 하차장소를 미리 상의해야 될 수도 있습니
②-1	【利用方法】(乘车方法)	Cách sử dụng	ใช้งาน)	How to u	[Cara Penggunaan]	အသုံးပြုနည်း	이용방법	
②-2	デマンドタクシ「需求响	Đãng ki dặt xe	(Taxi)	Demand	Pemesanan Taksi Demand	အသုံးယူကြိုတင်စေရ	디맨드택시 예약접수	
③-1	【運行区域】(通行区域)	Vùng vận hành	บริการ)	Sercie A	Area Layanan	ဝန်ဆောင်မှုခံယူ	운영구간	

②多言語版チラシ (中国語とタイ語)

川越本町 デマンドタクシー 「出行号」
 川越本町内全域運行
 予約電話 ☎ 0547-59-2355
 予約可能日時：平日 午前7時～午後12時、午後1時～午後7時
 休日・祭日：午前7時～午後12時、午後1時～午後7時

【乘车须知】
 ・川越本町全域の居民様は乗車可能
 ・上车或下车地点仅限“公共场所”（如车站、政府机关、农业协会、诊所、邮局、商店及神社等）
 例如：从自己家出发乘车的的话，就需前往上述“公共场所”下车
 如果是从“公共场所”出发乘车的的话，则可以自由选择上下车地点
 ・若您指定的上下车地点车辆无法进入，可能需要到附近的其他指定地点。

【运行区域】
 川越本町内全域运行

【运行时间】(每日运行)
 周一至周五：上午7点～上午12点、下午1点～晚上7点 (含节假日休息时间)
 周六及周日：上午7点～上午12点、下午1点～晚上7点 (含节假日休息时间)

【收费标准】

10km以内	100日元
10km以上～12km以内	200日元
12km以上～15km以内	300日元
15km以上～20km以内	500日元
20km以上	1,000日元

※年滿3岁至学龄前的小学生、小学生、初中生、高中生、75岁以上长者、持有残疾证明者，可享受半价出行

有关预约与运营费的咨询 请在可预约的时间段内致电。
 大铁出租车 千头营业所 ☎ 0547-59-2355

川越本町 デマンドタクシー Odekake-go
 川越本町内全域運行
 予約電話 ☎ 0547-59-2355
 予約可能日時：平日 午前7時～午後12時、午後1時～午後7時
 休日・祭日：午前7時～午後12時、午後1時～午後7時

【乘车须知】
 ・川越本町全域の居民様は乗車可能
 ・上车或下车地点仅限“公共场所”（如车站、政府机关、农业协会、诊所、邮局、商店及神社等）
 例如：从自己家出发乘车的的话，就需前往上述“公共场所”下车
 如果是从“公共场所”出发乘车的的话，则可以自由选择上下车地点
 ・若您指定的上下车地点车辆无法进入，可能需要到附近的其他指定地点。

【运行区域】
 川越本町内全域运行

【运行时间】(每日运行)
 周一至周五：上午7点～上午12点、下午1点～晚上7点 (含节假日休息时间)
 周六及周日：上午7点～上午12点、下午1点～晚上7点 (含节假日休息时间)

【收费标准】

10km以内	100 日元
10km 以上 12km 以内	200 日元
12km 以上 15km 以内	300 日元
15km 以上 20km 以内	500 日元
20km 以上	1,000 日元

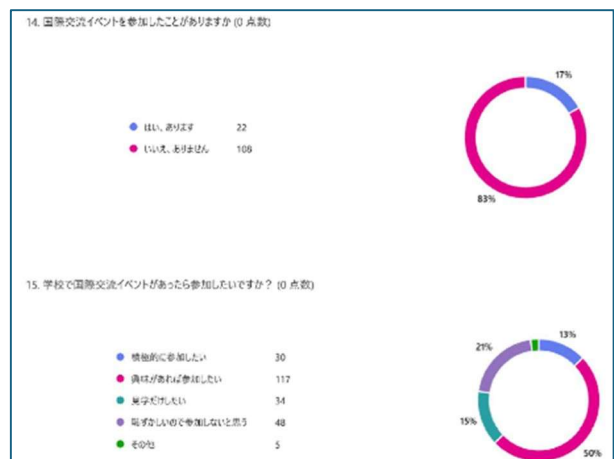
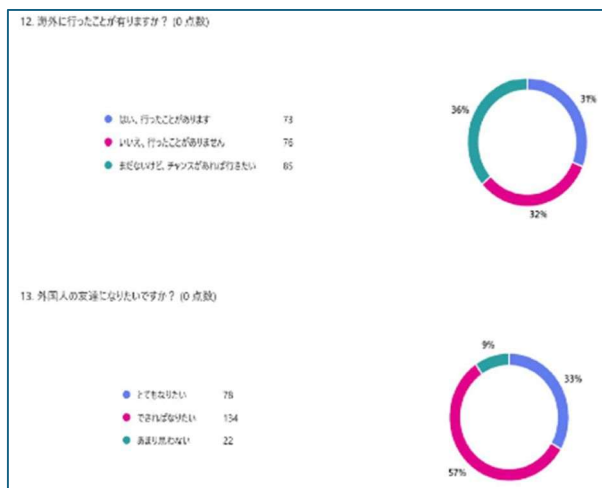
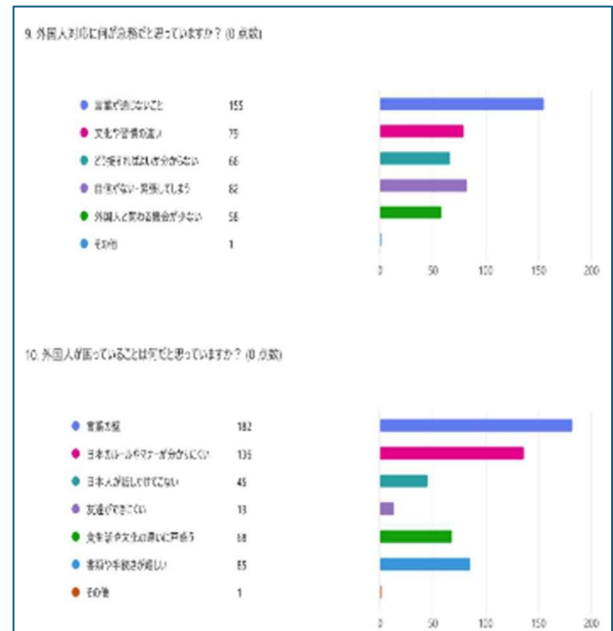
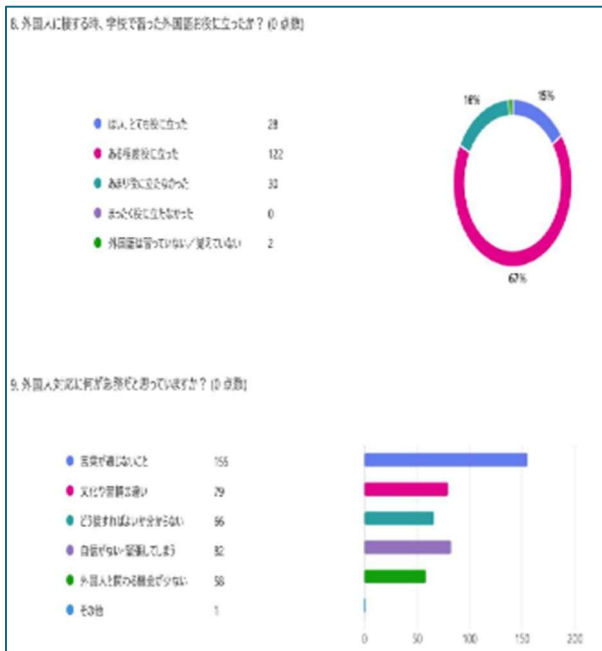
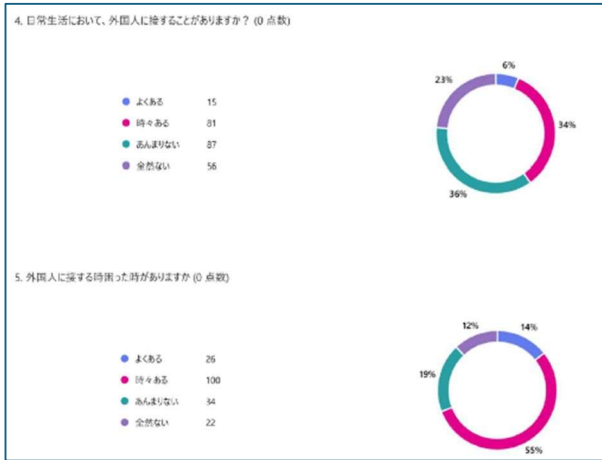
※年滿3岁至学龄前的小学生、小学生、初中生、高中生、75岁以上长者、持有残疾证明者，可享受半价出行

有关预约与运营费的咨询 请在可预约的时间段内致电。
 大铁出租车 千头营业所 ☎ 0547-59-2355

③聞き書きの写真



④ 多文化共生アンケート結果（一部）



静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡県立大学 薬学部 分子病態学分野

教 員：刀坂泰史

参加学生：村松祐佳（薬学部5年生）

関戸花萌（薬学部4年生）

(以下本文)

1. 要約

川根高校では学生数の減少を改善するため「川根留学生」制度を立ち上げ、県内および県外から川根留学生を募集している。そこで多くの生徒から選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校存続による川根地域の活性化を目指している。そこで川根地域・川根高校より大学との連携の企画提案と実施について提案をいただき、協力のもと本プロジェクトを実施した。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

川根高校理科教諭との打ち合わせを経て、高校生物の時間で単元学習の範囲を超えた実習を実施した。具体的には血圧変化のメカニズムを学ぶ実習と、PCR実習の2つである。薬学部および大学院生の学生2名と協力し、講義から実習を実施した。高校生には少し難しい内容を含んでいたが、実施後に行った川根高校教諭との会議では、高校生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

- ・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
- ・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
- ・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
- ・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

以上の内容より、川根高校生徒にとって有意義な実験実習授業であり、本プロジェクトの目的を達成できたと考える。最終的な目標である高校のブランド化については短期的には難しく、卒業生の進路や本プロジェクトを継続することで長期的な視野で考える必要があり、継続的な実施が望ましいと考える。

2. 研究の目的

学生数の減少により、高校存続が危惧される状況を鑑み、平成 26 年度から「川根留学生」制度を立ち上げ、県内全域を対象に生徒事集を開始した。平成30年度からは募集対象を県外にも拡大し、約半数が川根留学生になった。これまで以上に留学生または川根地域（高校連携中学3校）の生徒からも選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校存続による川根地域の活性化を目指す。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

3. 研究の内容

川根高等学校の魅力向上・ブランド化を目的として、高校生を対象とした授業連携・実験実習を行う。薬学に関する実習を行うことで、学習内容のより深い理解、大学研究への理解と進学意欲向上、また薬学・医学領域への興味を持ってもらうことで学生の進路決定に重要な機会となると考える。静岡県立大学との密な連携をとっていることは県内大学への進学を目指す高校生にとってアピールにもなり、魅力向上につながると期待する。

具体的提案としては、「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業」である。当教室は医学薬学生物学を中心に研究、さらに大学教育を担当しているため、高校生が学習した内容を中心に応用発展的な課題について取り組む。さらに以降、継続的に授業連携を実施することで定着化、ブランド化につながると考える。"

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

血圧とは、心臓のポンプ作用によって全身に血液が送り出されるとき、血管の内壁にかかる圧力のこと、心臓が収縮したときの血圧を最高血圧（収縮期血圧）、心臓が拡張したときの血圧を最低血圧（拡張期血圧）という。高血圧を発症すると脳卒中、心筋梗塞、心不全、慢性腎臓病といった疾患の発症リスクが増大するため、定期的に血圧をモニタリングすることは大切である。血圧は疾患以外にも運動、温度変化、体位変換、深呼吸といった要因により生理的に変化する。本実習では血圧測定法の体得と合わせて、生理的な要因で変化する血圧の測定及び、血圧変動の作用機序を考察する。

コロナウイルス感染症などの感染症が流行したこともあり、PCR検査の意義や基礎的理解の必要性が高まっている。生物学的実験にも必須の技術である。高校生物でも原理について学習するがより理解を深めるため実習を行い、その理解を深めると同時に遺伝学を含む生命科学研究に興味を持ってもらう。

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

A：予定通り実施した。

(3) 実績・成果と課題

高校2年生22名の特進クラスを対象に1コマ（50分）の講義と実習を行った（写真参照）。川根高校理科（生物学）教諭との打ち合わせを経て、高校生物基礎の時間の1コマを高校生物の範囲を超えた実習を実施した。具体的には運動前後で血圧を測定し、実際に血圧が変化することを体験し、神経系による血圧変化のメカニズムを学ぶ実習である。また高校3年生4名のクラスを対象に1コマ（50分）のPCRに関する講義と実習を行った（写真参照）。薬学部の学生2名と協力し、講義から実習を

実施した。高校生には少し難しい内容を含んだが、実施後に川根高校教諭との話より学生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

- ・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
- ・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
- ・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
- ・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

(4) 今後の改善点や対策

実習実施後、高校教諭、川根本町、大学の3者にて改善点と対策について協議した。実施内容・講義については大きな問題はなく、高校生の満足度も高く、継続して実施することで長期的目的が達成できると考えられる。継続して実習を実施できているため、より充実した内容となっていると協議会での結論となった。さらに大学生が実験などでメンタ的な役割で関わり、コミュニケーションをとる時間を取ることができ、県内大学および医療系学部への興味関心の向上が期待できる。継続実施によりさらにブラッシュアップすることができると考える。またSNS等で活動内容を発信することで静岡県内外の中学生への情報提供をもっと積極的にすることも検討事案である。しかし少子化そのものは改善できないため、学生数を増加させることは現実的には困難である。現在の学生に対して充実した授業、実習を踏まえた教育の質の向上に貢献したい。

5. 地域への提言

「川根留学生」制度は一定の成果を挙げており、地域活性化において大変素晴らしいプロジェクトであると考えます。静岡県立大学は地域貢献を重要事案として進めており、静岡県内市町村や企業の魅力化向上のために貢献している。高校の魅力は多様であり、またこれまでの歴史があるため新たなブランド化は短期間では困難であると考えます。今回のような大学との連携プロジェクトを継続することで、高校生の進路選択（特に県内進学希望、医療系学部志望者の増加）に寄与し、次に続く学生の高校選択に影響を与えることができると考えます。またこのように高校が魅力的になることで地域そのものの魅力向上、地域医療の充実、など川根地域の活性化につながると期待します。

6. 地域からの評価

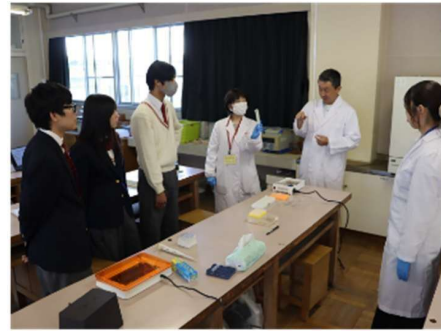
昨年度の課題や反省を踏まえ、オンラインでの高校教諭・大学間での打合せなどを早い段階で重ねたことで、高校・大学ともに効果的な授業の実施ができた。

高校教諭からは、「普段の教科授業の発展的な学習を、大学教員や大学生に丁寧に指導して頂き、生徒は意欲的に実習することができた。高校での学習内容の理解も深まり、高校での学びの重要性にも改めて気づくことができた。」等の声をいただいた。

次年度以降も継続的な実施に加え、より専門性の高い教科においても大学との連携を深め、発展的な学習の機会を作りたいという意向を受けた。



導入講義



PCR実習の説明



大学生による
血圧測定指導



血圧測定実習の様子



大学生と実験する様子



PCR実習の様子